
シルヴァニアにようこそっ！！（完全版）

下弦の月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルヴァニアによっこそっ！！（完全版）

【Nコード】

N7894Y

【作者名】

下弦の月

【あらすじ】

先ほど完結したシルヴァニアによっこそっ！！の完全版になります。設定やキャラなどの性格など若干修正変更あります。

あらすじ

記憶喪失というありきたりな症状を抱えつつ、目覚めた少女ウィナ・ルーシュ。

記憶喪失でありながらも何故か昔は男であり、この世界とは別の世界に存在していた記憶を持っていた。

記憶の矛盾。その先にある答えとは？

ヨーツテルン大陸、新都シルヴァニアにて少女の冒険の幕が今開く。
ただいま第1章 旅立ち編 執筆中

プロローグ

「……ここは？」

この都でも昔からある宿の2階。

1人の少女がゆっくりとまぶたをあげる。

アメジストの双眸は、不思議そうに周囲を見回す。

一見すると普通の少女のような反応であるが、観察力に長けているものが見るとそこに違和感を感じるだろう。

彼女の年齢からはそぐわない、経験からくる周囲への観察。

それは長く旅をしている者が身につける能力なのだから。

少女は、まだ頭が働いていないのだろう半眼に記憶を探っているような仕草をとる。

そして、唐突に眉が跳ね上がる。

「誰だ？」

警戒を含んだ彼女の呼びかけ。

年代を感じさせる木製の扉を開け、入って来たのは少女と中年の男。少女の方は目の覚めるような赤い髪に目をし、ポニーテールが特徴的であった。

男の方は無精髭をはやしよれた格好をしていたが、歩く動作が訓練をしているもの特有の足捌きであった。

彼女は、自身の中の警戒段階を一段上げる。

少なくとも彼らは一般人ではない。

そう考えた。

「あ、目覚めたんですねー」

明るい口調で声をかけてくる少女。

「身体の方はどうだ？」

と男の方もこちらを気遣うように言ってくる。

「ここはどこだ？」

男のような口調に、彼らは一瞬顔を見合わせ、

「ここは、新都シルヴァニア王国の中心都市ピティウムですよ」
「そこでここは大通り外れにある宿だ」

「……」

新都シルヴァニア王国。

中心都市ピティウム。

その単語は、彼女の美麗な表情を歪ませるものであった。
なぜなら彼女にそれらの言葉は聞いたことがないのだ。

(名前からすると……ヨーロッパ、海外の国……か?)

彼女の記憶によれば、王政など敷いている国は聞いたことがなかった。

それに少女の髪や目の色。

血のような赤。

そんな目の色をした人種が存在することなど彼女の記憶にはない。

(……それに)

目を覚ました時に感じた違和感。

彼女の記憶によれば、自身は男であったはず。

なのに明らかに女性になっている記憶との差異。

(手持ちの情報から答えを出すことは難しい……か)

現在持ちうる情報だけでは、今自分が置かれている状況を判断するには難しい。

ゆえに彼女は大胆にも彼らに告げた。

「 どうやら俺は記憶喪失のようだ。悪いが知っていることを教えてもらえないか? 」

彼女の言葉に彼らは目を丸くした。

「なるほど、そいつは困ったな」

男 アルバ・トイックは椅子を逆に座りながら大して困った表情
せずに言った。

「分かるのは、名前とわけのわからない記憶か。こりやお手上げだな」

「団長！。誠意くらいは見せましようよ」

と赤いポニーテールの少女もこの状況を楽しんでいるように言う。

ベッドにて上半身のみ起こしている少女　ウイナ・ルーシュは呆れ気味に、

「あんたらそれでも騎士か」

「一応」

やる気の欠片もない返事に、ウイナはがつくしと肩を落とす。

彼らは、この新都シルヴァニア王国にて働いている騎士であった。

しかも王国直属の騎士団の中で位持ちというエリート騎士。

正騎士団第5位【青の大鷹】。

それが彼らの所属する騎士団の名だ。

明らかに騎士団の名前と彼らの行動があつてない気もする。

しかし、彼女は本気で彼らを侮つてはいなかった。

こう事情を話して理解できたことだが、彼らに隙はない。

こちらはただの小娘だということにもかかわらず、警戒を外してはいない。

そして一般人なら警戒していることすら気づけないレベルの自然な警戒をしている。

それだけでかなりの技量を持っていることを匂わせていた。

（だが、男よりも女の方が問題だ）

ポニーテールの少女　リティ・A・シルヴァンスタイン。

貴族のような名前だがごくごく普通の騎士とのことらしい。

（　底が見えない）

彼女の記憶からは考えられない赤い瞳は、こちらの命を脅かす魔性の存在に思えた。

「しっかし、マジで困ったな。」

一応、身元不明ってという件で身元がはっきりとわかるまでこっちであずかるくらいはするが」

渋面するアルバ。

彼の言いたいこともわかる。

「ただの記憶喪失じゃない。元から身元がないのかもしれないだろう？」

「そうだな。」

おまえさんが言っていることに虚言がなければそういうことになるな。

その記憶とやらだとこっちとは違う世界にいたということだったか？」

「そういうことになる。」

だが、よく信じたな。

俺からするとあまりに突拍子もないことに思えるが」「
ウイナの言葉に、アルバははあとため息をつき、

「まー、職場は割と何でもアリなところだな。
器は広いんだわ」

「団長の器は、器だけならシルヴァニアーかもしれませぬー」
にやにやと笑うリテイ嬢。

「リテイの妄言はおいておいて、だ。」

とりあえず、記憶の方は後回しにしておいてここで生活することを考えた方がいい気がするがどうする？」

「あんたは、身元不明の人間を雇おうと思うのか？」

「普通は思わないな」

肩をすくめてアルバは答えた。

「だが、あくまでも普通はだ」

「?どういうことだ？」

「おまえさんが言っている内容で一つ、気になることがある」

「記憶の中では男性で、身体は女性だったという話ですね」

「単純に性同一障害じゃないのか？」

「こっちはそういう言葉はないんだっただか」

「ないですけど、意味はわかりますよ」

リテイはいい、「けど今回はそういうのじゃなくてですね」と前置きし、

「リテイのヤツの言うとおり。」

この世界、というかこのヨーロッパ大陸には【加護】という力がある」

「【加護】？」

「簡単に言ってしまうえば、自分達以外の者から力を永続的に借りる手段だな」

「ぶっちゃけると、神様から力を借りるんですけどねー」

「……神？神がいるのか、ここには」

「いえ、ウイナさんが想像しているものとは少し違いますよ」

ぴしっと人差し指を立てて、リテイは説明した。

「この世界を創造したのは、創造神と呼ばれていて　こちらは本当に神様です。」

そうじゃなくて、この世界には種族として神と呼ばれる存在がいます。

その名称に相応しい能力、力、知識を有し人では決して対することができない存在　畏怖を込めて【神】と称された存在です」

「種族としての神……」

「はい。」

彼らはもつともこのヨーロッパ大陸において弱い種族である人種族に力を貸すということをしています」

「力を貸す……ね。」

けどタダで貸すんじゃないんだろう？」

「……頭の回転が早いですねー」。

結論から言いますと、ウイナさんの言葉が真実その通りだとすると【加護】を授かった【代償】として姿を変化させられた可能性があるわけですね」

「なるほど。」

話はわかった。一つ聞きたいんだが」

「なんでしよう?」

「何故、種族【神】は人種族に力を貸すんだ? 憐憫か?」

「こちらも諸説あるんですが……」

彼女は眉根を寄せ、

「一つには刺激がないので娯楽として力を貸すというもの。

神種族は、その命も永遠に近く中にはそれが苦痛で自ら命を絶つものがあるとかいないとかあるんですよ。

【加護】を授けることでそのものと接続リンクすることができ、そのものを四六時中おもしろおかしく観察することができるそうです」

「いい趣味とは言えないな」

「そうですね」。

後は神種族と対抗できる種族、魔族との戦いに備えてでしょうか。

このヨーツテルン大陸には、多種多様な種族が存在するんですが。

その中でも神種族と唯一拮抗できるレベルの力を持っている種族が、魔族です。

彼らもいる生まれたかは諸説あってわかりませんが、何故か神種族と敵対しています。

理由は謎です。

けど、今は冷戦状態ですね」

「冷戦?」

「魔族達の王、魔王が神種族に囚われているため魔族達は神種族に逆らうことができないんですよ」。

神種族は、魔王を魔族達へ解放する条件として人種族を助けることを持ち出していて魔族側もそれを飲んで今は人種族に対して友好的です」

「……ふむ」

「などなどいろいろ人種族に力を貸す理由は推測できるんですが、真相は謎です。

ほとんどの神種族はヨーツテルン大陸ではない他の大陸にいますし、真相について聞いても口をつぐみますから」

「そういつこった。

あと【加護】に対してどんな【代償】を払うのか、その内容自体は加護を授ける神による。

気前のいい神なら、リスクの少ない代償を。

性格的にねじれ曲がっている神なら、リスクの高い代償を」

「……なるほど。

ちなみに性別が変わるのは、リスクが高いのか？」

「そうですねー……」。

割とよくあるレベルですかね」

リテイは、あごに手をあてて答える。

「ひどい代償になると、生涯植物しか食べられなくなるとか。

常に水に触れてないと乾くとか、

まっちょになるとか。

いろいろありますね」

「俺がまだ幸運な方だということがわかった。」

「ま、そこまで幸運でもないけどな。

性別変化なんて、一生に関わる問題だしな」

アルバは後ろに手を回し、髪を掻きながら言う。

「ほんじゃあ、さっさと誰の加護を受けているのか調べてみるか」

そついい、早速外に出る準備を始めた。

「ここは神殿か？」

ウイナは、目の前の建造物を見上げながらつぶやく。

白い円柱が規則正しく並び、他の建物より倍以上もある高さ。

白塗りの石が神殿へと続き、蒼と白の紋様の聖衣を着た聖職者

神官達があちらこちらにいる。

「そうですねー」。

ここは、アステノート神殿。

創造神が眷属の一柱　宵闇の聖女を祭る神殿です。」

トリティは説明し、にやりと笑う。

「ちなみにその格好、よく似合っていますよ」

「むっ」

ウイナは少しむくれてみせる。

ここに来る前、ウイナは自分が着る服を持っていないことに気付いた。

着ている服は、病人が着る白いロープのような服で、下着も何もなく裸の上に布一切れという状態。

このまま歩くといくらなんでも警備隊などから職務質問を受けるということで、トリティが服を持ってきたのだが……。

上は民族衣装なのだろう、不思議な模様の上着。

下は何故か赤のスカートである。

しかも生足を見せないように黒のストッキングのようなものをはいている。

どこからどうみても普通の少女としか思えない格好だった。

「すーすーするんだが」

「慣れますよ」

トリティは一向にとりあってくれず。

宿から大通りを抜け、神殿までやってきてしまった。

「ここで、【加護】を受けるのか……」。

ところで【加護】は誰でも受けることができるのか？

「詳しいことはこの神官に聞いた方がいいな、ほれ」

アルバが指を差す先に、1人の女性神官がいた。

紫色というウイナの記憶ではありえない髪をした女性は、その長い髪をゆらゆら揺らしながらこちらにやってきた。

少しばかりその端正な面持ちに怒りの感情が見え隠れするが。

「久しぶり。カティナ」

「また貴方ですか、アルバ。少し礼儀を覚えては如何ですか？
貴方ももう正騎士団として高い地位にいるのですよ」

「礼儀は弁えているさ。」

「礼儀を弁える相手にはな」

「……全く貴方という人は」

呆れてようにため息をつくとき、ウイナの方へ向き直る。

「あら貴方は……？」

「俺はウイナ・ルーシユ。」

記憶喪失の人間だ」

「アルバ」

「なんだ、カティナ」

「……彼女が？」

「なんのことだかわからないが」

目を細めた彼女の問いに、アルバはわからないとすくめてみせる。

「わかりました。詳しい話はこちらで聞きましょう」

そういい、カティナは神殿の奥へと彼らを導いた。

「ふむ」

白い。

どこもかしこも白い。

ウイナは、興味深げに周囲を見ていた。

それなりに古い建物のようだが、それにしてもしみ一つないほどの
白さは病的な美しさを感じる。

「綺麗でしょう？」

この神殿は永久不変の陣を形成し、その後には建てられたものなので
すよ。

だからしみや傷といったものが普通の建造物と違ってほとんど見ら
れないのです」

こちらの顔色に気付いた神官カティナが誇らしげに言ってくる。

「ああ、綺麗だな。」

「……ところで永久不変の陣というのは？」

「そういえば貴女は記憶喪失でしたね。」

永久不変の陣は、簡単に言えば霊輝術の一つです」

「霊輝術？」

聞いたことのない言葉に思わず問い返してしまう。

「……なるほどそこから説明しなくてははいけませんね」

神官のカティナは、真剣な面持ちで説明を始めた。

「この世界には【霊素】と呼ばれる全ての存在の素となる物質が存在します。」

【霊素】は、全ての生命、物質に含まれこの質や量でその存在の在り方を変化させると言われています。

もちろん、私達人間も【霊素】が含まれています。

その【霊素】を使い、様々な現象を起こすことを【霊輝術】といいます」

「魔法……みたいなものか」

小声でつぶやくウイナ。

カティナの説明は続く。

「【霊輝術】は、【霊素】を使う術。

その特性ゆえに誰にでも扱える力です。

誰にでも扱えるということは」

「悪いことに使うものもいるということか？」

「その通りです。」

史実、この小国、大国が乱立して存在するヨーロッパ大陸において唯一大陸統一をなした国家。

カディアガルド王国の時代において【霊輝術】の乱用があり、重く見た神々が人に封呪を施たとされています。

それ以後、人には大きなことに【霊輝術】が使えない身体となり子々孫々まで永劫に続く祝福を受けることになったとされています」

「祝福というよりは呪いに近いと思うが」

ウイナの問いかけに、カティナは首を横に振る。

「いいえ、結果として人は人として生きる大切さを知ることができたのです。」

過ぎた力は、人を容易に狂わせます。

どんなに聖人君子であろうと、強大な力はそのものの弱い部分に浸食し、欲望を顕在化させるのです」

経験でもあるのだろうか、彼女の言葉には深みがあった。

「現在、人に与えられた【霊輝術】の力は第五まで許可されています。」

治癒や、防御、生活に使えるレベルでの【霊輝術】の行使が第五に設定されています。

第五 正式名は、第5段階霊素行使許可能力。

それ以上の【霊輝術】の行使には【アナタイム霊素変換器】が必要になります。そしてこれは私達神殿側が管理しています」

そういい、カティナは胸元に行っているペンダントを見せる。

銀色の金属を加工し、不思議な文字が刻まれているその中央には寶石が鎮座していた。

その寶石は、蒼く中心には何か焔が灯っているかのようにゆらゆらと揺らいでいる。

「私の場合は、これが【アナタイム霊素変換器】になります。」

これを行行使することで第3まで【霊輝術】の行使が可能になりますね」

「……各制限の【霊輝術】はどんなことができるんだ？」

「第五は先ほど説明したのでおいておきます。」

第四は、主に破壊の【霊輝術】が可能になります。第五の【霊輝術】のよりも強い【霊輝術】の行使ができます。」

第三は、便宜的に全てのカテゴリの【霊輝術】が可能になります。」

ですが、全てにおいて万能というものはないので基本的に2つから3つのカテゴリに絞られます。」

そしてそのカテゴリに対しては、制限が解除されますので理論上鍛えれば鍛えるほど【霊輝術】の行使力は上昇します。

ここまでは、普通の人間レベルの霊輝術の制限範囲です。

ここからは事実上、人を超えたものの制限範囲となります。

第二は、第三にプラスして【霊輝術】の具現化が可能になります。

例えば火の霊輝術。

第五レベルでは、指先に火を灯す程度ですが、第三では形状や規模、性質なども変化させることができるので火でできた龍のようなものも生み出すことができます。

そして第二になると火の龍を宿した剣や槍といった現実にある物体へと集約させることができます。

このレベルにおいては【霊輝術】の行使に必要な時間が軽減され、具現化した剣を振るうことで火の力を顕現させるなどといったことも可能です。

「魔法武器マジックウェポンみたいなものか」

ウイナはそう理解する。

「便宜上最後の行使許可。第一は【霊輝術】の常時顕在化が可能になります。」

「常時………?」

「ええ、常時。」

つまり、第二において【霊輝術】の具現化されたものは永遠不変ではありません。

先ほどの例を言えば、火の龍を生み出す霊輝術を剣に具現化したものを振っていけばいつかは霊素を使い果たし、消えてしまいます。

普通に術として行使するものを具現化することで、いつでも発生させたり力の強弱をつけたりと変化させることができますが、その内にこもっている霊素は増えることなく、ただ減少していくのです。

それが第二の特性といえるでしょう。」

「ということ、第一というのは」

「ええ、顕在化したものは自ら靈素を吸収することができるようになる。

つまり私達、人と変わらない器官を有することでまるで生命のように活動ないし、存在することができるようになるのです」

そうカティナは断言した。

その力は紛れもなく

「【創造】……」

「ええ、まさしくこの世界を創造した力 創造神の力です。

そしてこの力を扱えるものは未だこのヨーロッパ大陸において1人も存在しません」

かつかつかつと歩く音だけがやたら廊下内に響いた。

それから世間話兼自身に置かれている状況などを説明しながら目的地にへと到着した。

荘厳な扉の前にカティナは聖印を切る。

同時に胸元のペンダントが光り始め、ゴゴゴゴと重い音をたてながら扉は開かれた。

「魔法陣か……」

「？魔法陣というのはわかりませんが、これは靈輝陣です」

カティナは素晴らしい、「我が旅路に希望の灯火を【照明】リヒトマーク」と靈輝術を発動させる。

彼女の掌に生まれた光の光球はそのまま天井へと上がっていき、パッと弾けて光の粒子を降らせる。

落ちた粒子は壁や地にはりつき、周囲の暗闇は淡い光によって打ち消され、部屋全体に灯りが灯った。

「なるほど、これが【加護】の陣か。始めて見たな」

アルバが地に書かれた陣を読み取り、感嘆の声を上げる。

「【通信】と【強化】、【線】に【場所】、【靈素集積】といった

霊輝術が刻まれてますねー。

その他にもいろいろあつて勉強になります」

「お二方。」

ここは神聖な場所です。

あまりハメを外されるようではありませんなら、この場から叩き出しますよ?」

額に青筋をたてて、胸の前に握りしめる拳はばちばちと雷光を轟かせていた。

「「さーせん」「」

「誠意がありませんっ」

何も無い空間から生み出された雷が、二人の頭に降り注いだ。

ぷすぷすとこんがりミディアムレア状態に焼き上がった二人を無視し、カティナはウイナを陣の中心へと誘う。

「今から貴女に【加護】を授けた神様を突き止めます。

貴女自身に被害が被ることはありませんので、楽にしてください」

「……了解」

「……さて、始めますよっ」

どこから取り出したのか、自身の背丈の倍以上もある錫杖を空へと突きつけ、口を開く。

「アステノート神殿が長、カティナ・アースティアが謁見を願います」

たんつと地を突く錫杖。

「我らが神よ。」

我らの真なる神よ。

貴女の従僕たるカティナ・アースティアが、願います。

この者の道を指し示した存在を我が杖に」

だんっ。

先ほどよりも強く地を突く。

と、突いた部分を中心に霊素が収束する。

霊素は肉眼で見えることはできない。

それは、人の身にそれを感知できる器官がない　　というわけではない。

人には使っていないだけでそういった超常的な現象を感じ取れるものがある。

ならば何故霊素を見ることができないのか。

答えは簡単。

あまりにも濃度が薄いため、見ることができないのだ。

何かがあるくらいは感度の高いものなら感知できるかもしれない。

だが見ることはできない。

そういった特性のある霊素が、カティナの杖の末端に収束しまるで花びらのように霊素が具現化する。

カティナの霊輝術の制限は第三。

それゆえに第二や、第一の領域である霊輝術の具現化、顕在化は不可能である。

しかし、

世の中には例外というイレギュラーが必ず存在する。

それこそが、彼女に力を貸している存在の証明他ならない。

「現れ出よっ！」

力強いカティナの言葉がこの聖域に響く。

聖域内を乱舞していた霊素の花びらは、宙空へ舞上がりそして収束し、人の形を造り上げていく。

長い黒髪。

アメジストの双眸。

スリットの入った上から下まで一つなぎの服装に、赤と黒の二色の色彩が映える。

美麗な顔とは裏腹に、その瞳はどこまでも深く、深淵を覗きこんでいると錯覚覚える。

「っ……そんな、やはり」

カティナの顔に驚愕の色が浮かぶ。

いや彼女ばかりではない。

「なるほど、こいつは 厄介だ」

にいつと唇の端をつりあげるアルバ。

「でも、想定内のことですよ」

驚きもせず、その事実を受け入れるリティ。

そしてウィナは。

瞬きもせず、彼女と対峙する。

見上げる先にいる彼女と、見下ろせる先にいる自分。

これが自身と彼女の距離を示しているかのようであり、事実なのだろう。

「 わたしの名は、ミーディ・エイムワード」

「っ!？」

霊輝術がかつてに……っ」

カティナが目を見開く。

彼女が施した霊輝術は、あくまでも加護を授けたものを立体モデルとして投影するだけのもの。

ゆえにしゃべることなどできない。

ただのモデルだからだ。

その異常に気付いたアルバと、リティは臣下の礼をとった。

紛れもなくここににいる者がなんなのか、本能的に理解したのだ。

「貴女の名前。」

教えてくれるかしら?」

「……俺は、ウイナ・ルーシュ」

「良い名前ね」

ふっと微笑する彼女。

おもむろに彼女　ミーディは、何かを放り投げる仕草をする。
だんっ。

とウイナの足元に何か突き刺さった。

「それ、あげる。」

使いこなしてみせなさい」

その言葉が合図だったのか、実体化するソレは刀であった。
鞘に入ったままの刀が、地に突き刺さっていたのだ。

「　赤錆の魔刀か」

伏していながらも小声で言うアルバ。

「そうなると間違いないですねー」

リテイもアルバの推察に同意する。

彼女を知っているものであれば、その武器を知らぬものはいない。
逆に、その武器を持つモノが誰であるか知らないものはいなかった。

そう、この国において。

「改めて自己紹介をするわね。」

我が名は、【闘神】。

【闘神】ミーディ・エイムワード。

このシルヴァニア王国において、女王の位にいるものよ
朗々とした彼女の声が、この聖域に響き渡った　。

第1話 準騎士の少女と【闘神】の加護を受けし少女

新都シルヴァニア王国、中心都市ピティウム。

王国を守護する騎士団を育成するここ、準騎士団学校にて早朝から訓練に励む少女がいた。

校舎外にある靈輝術の訓練が出来る施設 【練成の間】。

大規模な靈輝術の行使に耐えうる耐久力と、全校生徒が訓練できるだけの広さを併せ持つこの施設は、
学校長による【空間】と【結界】の靈輝術の力によって造られた。
練成の間には、基本何もなく地平線が見えるだけの広さしか存在しない。

入室、退出は特定の靈輝術を行使することで可能となる。

また訓練時間が8時間を超えるようであれば、勝手に外へと強制退去させられるという安全装置つきだ。

その練成の間にて少女は、靈輝術の訓練を行っていた。

「彼の者に聖なる盾を レイヴェルグ 【光盾】」

彼女から少し離れた所に生まれる光の盾。

盾といっても本当に盾ではなく、光の属性を持った靈素が空中に固まり平面的な防御膜を形成しているのだ。

真剣な面持ちで、彼女は やがてため息をつく。

「ロスト 【消失】」
パチンと指を鳴らすと、靈素はその形態を維持することをやめ空中に四散する。

「……靈輝術は、靈素を操る術」
黄金色に輝く瞳。

まぶたを降ろして、彼女は念じる。

空气中に存在するはずの靈素を直接操作するために。

右手に持っている彼女の【アナタイム霊素変換器】である杖。

その先端にある核に霊素が集まりだし　霧散した。

「やつぱりダメ……」

嘆息。

「術としては形成されているけど、これじゃあ発動まで遅すぎる」

霊輝術は、霊素を操ることで行使される術である。

霊素は、質や量で多様な変化を起こす物質。

術者はそれゆえに、術の構成において適正な量と質を見極め、霊素を収束させる必要がある。

この適正な霊素の量と質というのが難しい。

時間があれば問題ないが、騎士として戦闘に参加するようになった場合、そんな余裕が実践にあるとは思えない。

騎士は前衛にあるものだ。

戦いが苛烈な場所にて、霊輝術を行使するにはそれこそ呼吸をするくらいに自然なレベルでの行使が絶対条件だ。

その絶対条件を彼女は満たせていない。

ならば彼女の同僚はどうかというと……。

霊輝術の第二である具現化これを第三の身でありながら擬似的に行使できるものや、

はなっから戦場での霊輝術の行使を諦め、第一、第二である肉体強化、神経強化といった自身の力を上げる術を常時かけっぱなしにしているもの。

騎士の道を諦め、研究者としてこの学校を去っていったもの。

様々だ。

もちろん、全員が彼女のように悩みながら準騎士団学校に通っているかといえはそういうわけではない。

ただ単に人脈を作るためにいるもの。

女性にモテたくて入ったもの。

傭兵として将来働くため、準備として入ったもの。

騎士というステータスにあこがれて入ったもの。

やはり様々いる。

彼女は、真面目であった。

目的があり、それを為すがために毎日努力をしている。だが、努力をしただけで目的がすぐにも叶えることができるものが手に入るかといえば、そういうわけではない。

努力は確かに裏切らない。

そこで得たものは、確実に自身の実力となる。

しかし、成功するとか限らない。

それが、認めたくない世界の真実の一つだろう。

「あ、リア。こんなところにいたの？探したよ〜」

と、翠色の髪をした少女が彼女の素にやってくる。

「ディアーナ、何かあったの？」

「あつたよっ！しかもかなり重要事項っ」

興奮しているのだろう、ディアーナは両手をグーにして腕を上下に振る。

「重要事項………？」

「そうそうっ！！」

なんと驚け、リア。

あの【闘神】の加護を受けた人が現れたのよっ！！」

「っ、あの【闘神】の………」

息をのむ。

【闘神】といえば、このシルヴァニア王国はもちろん、他国でさえも知れ渡っている有名人　この国の女王ミーディ・エイムワードを思い出す。

「それ………本当？」

「ふっふーん。本当」

ソースはばつちりだよ」

「………そっか、【加護】か」

ぼつりとつぶやく彼女にディアーナは、

「また考えていたんだ」

「……まあ、そうなんだけど」

煮え切らない彼女の表情に、少女はやれやれと肩をすくめる。

「悩みすぎてもダメだと思うけど」

「わたしの場合は、悩んだ方がいいと思うんだけど」

「……頑固だなーリアは。」

ま、そういうところ嫌いじゃないよ」

そうしてぴしっと人差し指をたて、

「よしよし、お姉さんがいろいろ見てあげよう。まだ朝の調練まで時間あるし」

「お姉さん……」

ジト目で少女を見るリア。

「な、なによっ」

「うっん、なんでもない」

少女の背丈は彼女と比べて頭一つ半低い。

つまり　そういうことだ。

「それじゃあ、教えてもらおうかな」

「まかせなさいっ!!」

あ、でもあとで今考えたこと聞くから、ヨロシク」

半眼でにらむ少女にリアは、苦笑で返した。

「というわけだ」

「いや、何がというわけだかわからん」

騎士団が職務を行う庁舎の一室でアルバとウィナは椅子に座り対峙していた。

「こういうとき、つーかーで相手に情報を伝えられるとラクだと思わないか?」

「働け、この墮落騎士」

いい加減、アルバという騎士の行動に諦観の色が隠せなくなったウ

イナ。

本人もその視線の意味には気付いているものの、全く直す気配はない。

「ちなみに俺はMじゃねえ」

「誰も聞いてないから。さっさと話してくれ」

強いウイナの視線を受け、やれやれと彼はようやく話を始めた。

「明瞭簡潔に言えば、この国の女王の【加護】を受けたおまえさんはすごい。以上」

「……わかりやすいな、強いていうならもう少し付加情報が欲しいところだ」

「そうか。」

なら、おまえさんが今まで【加護】を授けなかった女王の寵愛を受けたため、国は大混乱だ。以上」

「なるほど」

腕を組み、ウイナはアルバの言葉を反芻する。

「この国の女王という権力者の加護を受けたことが問題なのか？」

「【闘神】なんて名がつくほどの戦闘能力を持つ存在の加護を受けたことが問題なんだろうな」

「……」

もう一度アルバの言葉を反芻し、

「それ俺が悪いことなのか？」

「いや」

二人は同時にため息をついた。

「まあ、あれだな。」

女王陛下はアホみたく強い。

そしてその【加護】を受けたおまえさんも将来的にはアホ二号的な強さを得ることになる。

ついでに現在は表面的には小競り合い程度で済んでいる他国間との戦闘だが、それが成り立っているのは戦力が拮抗しているからだ」

「つまり、ここに来て【闘神】の加護を受けたものが出てきたこと

で国々の戦力比が変化するということが

「そゆこと。」

まあ……そんなに簡単にすむなら俺達騎士団はいらないんだが

「実際は、戦力がある程度では手数が増える　　といったくらいか？」

「そんなところだ。」

だが、そう考えないバカどもがいたりする」

「なるほど、平和そうなこの国でもか」

「むしろいない方が恐ろしいと俺は思うがね」

アルバは、喉が渴いたのだろうテーブルにおいてあつた水を飲む。

「つて、わけでウイナ・ルーシユ。」

おまえさんはこの国から出て行くことを許可できない」

「　　理由はわかった。」

だがこちらとしてもはい、わかりました　　というわけにもいかな
い」

ばぢつと視線がぶつかり合う。

「……代替案を出そう。おまえさんの目的は？」

「一応、記憶を取り戻すこと……だな。当面は」

「当面……ときたか。」

ふむ、じゃあせめてこのシルヴァニア王国中を歩き回れる許可を取
ろう」

「追加で、図書館などの公共施設の無料使用もだ」

「ぬっ。」

外国に行けない分、知識で補い探すか……仕方ないな」

ほれと、アルバは一枚の書類をテーブルの上にだした。

「契約書……か」

「ああ、こうなった以上おまえさんには悪いが、このシルヴァニア
の騎士として生活してもらっ。」

これは王命だ。

断ればミーディ・エイムワード女王陛下、自らの処罰が下る。

ま、死刑だな」

気楽に言ってみせるアルバ。

「どうする？」

「こつというのは脅迫というんだ、やれやれ」

ウイナは肩をすくめ、自身の名前をすらすら記述した。

「これでいいか？」

「ああ、問題ない。」

にしてもちゃんと契約書読んだか？

内容知らずに契約結ぶことほど怖いことはないぞ」

「さらつと読んだ。問題はなさそうだからサインした、以上」

「ならいいか。」

さて、おまえさん ウイナでいいか？」

「ああ、別に。って今更なんだ？」

「最近、女性騎士が台頭していてねえ。」

いきなり名前で呼んだりするとセクハラとか言われるんだよ」

「女性……ああ、そういえばそうだったな」

ウイナはちらつと胸近くにある重量感溢れるものを感じながら、嘆息した。

「間違つても男子トイレに入るなよ？」

うちの騎士どもは飢えているんでな。襲われるやもしれん」

「なら蹴散らすのみだな。あと、そういうのがセクハラっていうんじゃないのか？」

半眼でにらむウイナ。

アルバはつくつくつくと笑いながら、

「違うない」

「それで、騎士になったのはいいが衣食住はこちら持ちなのか？」

「ああ、忘れていたな。」

いや、宿舎があるからそつちを使えばいい。もっともシルヴァニア内に家を借りたり、買いたいなら不動産屋を紹介するが」

「……今のお金は無一文だ」

「それはご愁傷様。

住は決まりだな。衣食については身支度くらい整えるお金は前もって支給されるから、それを使えばいい。あとの細かいところは女性騎士に説明させる」

コンコンと、扉をノックする音がした。

アルバは入出を許可すると入ってきたのは、先ほどの赤髪、ポニーテールの少女。ではなく、別の騎士だ。

「彼女は？」

「グローリア・ハウンティーズ。

まだ騎士にはなっていない準騎士団員だ。あっているよな？」

「はい」

ピンと背筋を伸ばしてこちらを見つめてくる少女。

金系のような黄金色の髪。

少しばかり先の方がくせ毛になっているのだろうか、内にくるつとカーブを描いている。

髪の色を同じ色をした瞳は、少々緊張の色が見え隠れしていた。

準騎士団員ということなのだろう、白と赤といった色調の制服を着、よく似合っていた。

「今後は、彼女を従者として騎士としての職務に励んでくれ。以上」

「いや、説明が少なすぎるぞ」

「細かなところは彼女に聞いてくれ。

俺も俺で書類仕事が終わらんのよ」

ほれっと親指で部屋の隅を差すアルバ。

そこには机があり、その上には天井に届かんばかりの書類が存在していた。

「……まあがんばれ」

手伝いはしないが。

ウイナはそう表情に出しながら、準騎士団員の少女と一緒に部屋から出た。

「グローリア・ハウンティーズだったかな？」

「はい」

「すまないが、こちらはほとんど初心者のようなものなんだ。いろいろと教えてくれないか？」

「わかりました。それではこちらへ」

グローリアは先に歩き出す。

「ところで」

「はい？」

くるりと振り返るグローリア。

金系の髪がふわあとなびき、窓から照らされる陽光に反射して輝く。

「自己紹介がまだだったな。」

俺はウイナ。ウイナ・ルーシュ。好きなように呼んでくれ」

「ならウイナ様」

「おおっと、そういうかたってくるしい呼び方はお互いやめよう。」

俺は君をリアと呼ぶから」

「ではわたしはウイナさんと呼ばせて 呼ぶことにします」

二人は笑顔で、そしてくすくすと笑った。

「ここがウイナさんの部屋になります」

グローリアに連れられてやったきたのは宿舎。

庁舎からわずか数分という近さに内心ウイナは喜んでいた。

仕事場に近い方がいろいろと便利なのだ。

部屋の中は、1ルームといったところだろう。

木製のベッドや、鏡付きの化粧台……………。

「化粧台 か」

がつくりと肩をおとすウイナ。

その様子に怪訝な表情を向けるグローリア。

「どうかしましたか？」

「いや、ここは女性の宿舎だったんだなーと再認識してな」

「はあ」

「……そういえば、俺の話はどこまで聞いている？」

「ウイナさんが【闘神】の加護を受けているぐらいでしょうか」

「なるほど」

つまり記憶うんぬんのは全く話をしていないということか。アルバの仕事の手抜きっぷりに呆れた。

「……じゃあ、そこから説明しないとダメか。」

このまま立って話もなんだ。中で少し話そう。時間は問題ないか？

「はい、大丈夫です」

部屋の中に入り、靴を脱ぐ場所があったのでそこで脱ぎ、中央で二人とも腰を下ろした。

木の床ということもあり、肌にひんやりとした感触が伝わる。

「まず、俺のことだが」

簡単に事情を説明した。

「……なるほど、そういうことだったんですか」

ふむふむと首をなんども振りながら、グローリアは整理しているようだ。

「女性についてはさっぱりなんで、教えてくれると助かる」

「わかりました。その辺はおまかせください」

胸を張るグローリア。

「それ以外だと……騎士の話だな。」

そのリアが俺の従者と言っていたが……あれはどういう意味なんだ？

「そうですね……。」

騎士になるための見習い修行。簡単にいつてしまつとそうなると思います。「

「見習い修行……か。」

なるほど。それは騎士になるもの全員が経験するものなのか？」

「いいえ、違います。」

このシルヴァニア王国において騎士となるには、いくつか道があってその内の一つが従者として騎士につくことです。

大抵の場合は、準騎士団学校に3年通い卒業後、所属したい騎士団の試験を受け合格できればその騎士として働くことができます。騎士としての資格自体は卒業時にいただけですが」

「リアは、何年目だったんだ？」

「ちょうど3年目でした。」

わたしも今回のこのお話は都合がよく了承しました」

「都合がいいというのは、どういうところか？」

その問いにグローリアは少しだけ逡巡し、

「……わたしの目的は騎士になることではありません」

「なかなかの問題発言だと思うが。」

「いいえ、学校でも騎士になる理由は様々ですから問題ないと思います」

意外にもしつかりしているようだ。

言葉使いとはうらはらに彼女の瞳は若干垂れているせいか、柔らかな印象を受ける。

しかし、芯はしつかりとしているようでブレは見えない。

隙がありそうでないタイプの人間か。

そうウイナは彼女を認識した。

「ところで喉がかわかないか？」

「……そういえば、少し」

気付いてみれば、朝から水分をあまりとっていない。

ウイナは立ち上がり、

「飲み物はどこにあるかわかるか？」

「あ、はい。」

共同の水場があるのでそこでお茶をいれましょう。」

というグローリアも立ち上がり、

「ウイナさん、あそこの棚を見ていただけませんか？」

「ん、何か あるな。」

これはお茶っ葉か」
円柱状の筒型の入れ物の中に、濃い茶色系の乾燥した茎などが見える。

「宿舎に住んでいる人に週一で【カテナ茶】のお茶っ葉が支給されるんです」

フタを開けてにおいをかぐと、ジャスミンに似た薫りが鼻孔に届く。「疲れがとれそうな……リラックスできそうなお茶だな」

「はい。」

わたしもこれが大好きなんです」

にっこりと笑い、リアはすぐ近くに急須なるものもあると助言し、二人そろって部屋から出た。

「計画は順調のようですね、お姉様」

空中に投影された画像には、ウィナとグローリアが部屋にいる姿が映っていた。

その様子をずっと見つめているのは、先ほどウィナ達の前に姿を顕在化したミーディ・エイムワード。

「……ええ、順調といえるわね。」

「……ええ、順調といえるわね。」

「……ええ、順調といえるわね。」

安堵するには早すぎるわ」

腕を組み、柱を背に彼女は画像投影している少女へと忠告した。

「……ええ、順調といえるわね。」

「……ええ、順調といえるわね。」

「……ええ、順調といえるわね。」

ムワード。

それこそが少女の名前だった。

「それもそうですね」

朗らかに笑うと、霊輝術で作りに出した映像を消し去る。

「そろそろ戻るわよ、ヘラ。」

しばらくは放っておいて問題ないでしょう。

わたし達が動くのはあの子が外に出るから」

「その時こそ、真の計画の発動ですね」

ヘラの言葉にミーディは首肯した。

第2話 中心都市ピティウムと大陸事情

「では一通りこの世界のことを説明しますね。」

「ああ、頼む」

お茶を無事入れることに成功し、部屋に戻ったウイナとグローリアは床に腰を下ろす。

直接床には触れないように部屋の隅にあった民族模様っぽい座布団に座り、グローリア先生の授業を聞くウイナ。

「まずは、この大陸の名前ですね。」

ここはヨーツテルン大陸という名前の大陸です。

もともと世界の中で大きな大陸だそうです」

「なるほど。」

で他の大陸への渡航は可能なのか？」

「一応、可能です」

「一応？」

眉間に眉を寄せ、グローリアは浮かぬ表情をする。

「一応といったのは、片道でしか渡航できないからなんです。

行きは問題ないんですが、こちらにいた住人がこっちに帰ってくる
ことだけはどうもできないようなんです」

「……………そういうことはよくある世界なのか？」

「いいえ、こっちでも珍しいというか……。ほぼ怪奇現象ですね」

「怪奇ね……………」

怪奇現象と片付けるには、ちょっときな臭い話である。

「つまりだ。」

このヨーツテルン大陸に住むものは、外に出ることは可能だが戻っ
てくることだけはできない ということか？」

「ええ、その通りです。」

それゆえ牢獄と、他の大陸の人々は言っているそうです」

「それはそつだらうな」

一息つき、グローリアは説明を続けた。

「ヨーロッパ大陸には様々な国が存在しています。

その中でも大きな国が4つあり、それらの国々がこの大陸を支配しているといっても過言ではありません。

領土の拡大を目指す血と武器の国　帝国エインフィリム。

神と精霊と人の調和を目指す国　聖徒フィーリア。

多民族による安定を目指す国　楽園バナウス。

そしてわたし達の国、新都シルヴァニア。

これらの4つの大国が、この大陸の均衡を保っています。ですが」

険しい表情で、グローリアは続けた。

「その均衡は大変危うく、何かの拍子で崩れてしまえば4大国は戦争へと発展すると言われています。

事実、少し前までは帝国による武力制圧がシルヴァニア王国も含み行われたことがあります。

その時は各国とも鎮圧部隊をすぐさま出兵し対応したのですが」

「帝国にとって、それは単なる陽動だった　か？」

「っ、はい。そうです……ってよくわかりましたね。

わたしがこの話を聞いた時そこまで考えつきませんでした」

「……カンかな？」

自信なさげに小首を傾げるウイナ。

その拳動にグローリアは少し萌えた。

「こほん。

ウイナさんの言うとおり、帝国の大出兵は陽動でした。

彼らはこのシルヴァニア王国の領土を狙っていたんです。

他国に派遣した兵士達よりは少ないものの、精鋭部隊を集中させてこの中心都市ピティウムを目前といったところまで侵攻される事態となつて」

テーブルの上に置いていたうさぎ模様のティーカップを取り、少し喉を潤す。

「そんな危機的な状況を一変に打倒したのはミーディ・エイムワード女王陛下でした」
少し熱のこもった瞳でグロリアは言った。

中心都市ピティウムを陥落せしめんと、帝国の精鋭部隊が数万から数万が目前へとせまっていた。
騎士達は、他の領土からせまってくる敵兵をくいじめようと闘っていた。

国境沿いにいる騎士達は帝国がシルヴァニア王国の中心都市ピティウムを目指していると知った時、すでに彼らは他国の敵兵と交戦中であつた。
助けを呼ぶことも、連絡することもできず彼らは決死の覚悟で敵をなぎ払い、そして自分達の都へと帰還したとき彼らは見た。

血の色のような赤い武器を携え、深紅に染まつた赤髪の女王の姿。
すでに敵と呼べるモノは誰もいなく、物言わぬ山の上に少女は無傷で立っていたという。

その姿を見た時、彼らは安堵しその場でひざまついたという。
自分達が王の強さにわずかながらも恐怖を抱いて。

女王が一人で闘っていたのは100日間。

それゆえに以後、この戦いは百日戦争と呼ばれる。
この戦いの後、各国はおもてだつてシルヴァニア王国への干渉はとりやめた。

そして冷戦と呼ばれる新たな戦いが幕を開き、現在もなお続いている。

「……すさまじいな」

その現場を見たわけではないが、ウィナは一度彼女に会っている。
アステノート神殿で。

その時見た彼女の双眸は、果てがない深淵。
ゆえにウィナは今の逸話が単なる大ほらとは思えなかった。

「わたしも直接見たわけじゃないですけど、でも本当なんだろうなあ
あと思っっています」

「見たことがあるのか？」

「一度だけ」

こくりと首を縦に振る。

「昔、準騎士団学校に入つて間もない頃に女王陛下がやってきて模
擬訓練をしていたたく機会があつて」

準騎士団学校に入つたばかりの新人と、卒業間近である最高学
年の生徒合わせた集団での模擬試合。

模擬試合といつても対するのはミーディ・エイムワード女王陛下下
人。

さすがに生徒の何人かは無謀だと上申ししたが。

「あははは、あなどられても困るわね。

わたしはあなた達の王よ。わたしが王の位にいるのはあなた達が触
れることすらできぬ領域にいるから。

御託はいいからさっさとかかってきなさい」

その女王陛下の言葉を受け、生徒達は一斉に仕掛けに行き

「全滅でした」

「……なるほど」

唇に指の腹をあてるようにして考える。

当然の理屈としてだが、人は人数で攻めてこられたら一人では対処
できない。

そしていくら技量のある格闘家であっても、数で攻め続ければいつかは疲弊し対処ができなくなる。

だが、ミーディ・エイムワードはその事実を覆す。

確かにこの世界には靈輝術なる魔法のような技術が存在する。

その技術をもつてすれば、武器を携えたものの攻撃を捌くことも容易なのかもしれない。

しかし、それは相手にとっても同じ事。

武器攻撃が届かない相手ならば、遠距離、中距離から靈輝術で闘えばいいことなのだ。

そうなることやはりの数の論理が戦場を支配する。

物語ででてくる無双などというのは物理的に難しいのだ。結局のところは。

「模擬試合といていたが、武器も靈輝術も使用可能だったのか？」

「はい。」

「しかも真剣で、です」

「……」

ますます頭が痛くなる条件だ。

はつきりいえば、そんな条件で無双は無理だ。

相手を全滅させるまえに、自分が全滅してしまう。

ということは、彼女は何らかのズルをやっているということだ。

「……思考の高速化は必須だろうな。」

少なくとも2倍以上はないと話にならない。あとはその反応についていけるだけの身体能力……か」

「ミーディ・エイムワード様の能力のことを考えているんですか？」

「ん、ああ。」

彼女から加護を受けている状態だからな、力の使い方くらいは思考しておいた方がいいと思っつてね」

そこまで口にしてふと思ひ出す。

「そういえば、リアは加護をもっているのか？」

何気ないその質問にリアの表情がくもる。

「……聞いちゃまずかったか」

「いいえ。」

そうですね。すぐバレると思いますから」

そっぴい、リアは耳の側にあるであろう髪の毛を手ですくつと普通の人間ではありえない長く先端がとがった耳が現れた。

「エルフか」

感嘆の声をあげ、ウイナは彼女を凝視した。

言われてみれば、彼女グロリア・ハウンティーゼは黄金の髪と目を持ちそのスタイルもまた良かった。

ファンタジーもので出てくるエルフの風貌に大変似ている。

ただ一部を除いてだが。

その一部は、胸の辺りから自己主張している何かである。

「この大陸に様々な種族がいると聞いていたな。ならエルフもいても当然か。」

「……エルフという名称であっているのか？」

耳が長くて、黄金色の髪や目をしているモデル体型　イコールエルフという等式がここでも成り立つのか、リアに尋ねる。

「はい。」

わたしはエルフです。

ただ落ちこぼれですけど」

苦笑いを浮かべるリア。

「落ちこぼれ？」

「……エルフは、この世界の種族の中ではトップクラスに位置する存在です。」

独自に発展させた霊輝術や、人に比べて遥かに高い身体能力。

種族神や、魔族にこそ劣るもののその次に位置するレベルの能力を保有しています。

そして、何よりもエルフがエルフたるのは生まれ持った加護能力です」

「始めから加護持ちなのか」

「はい。樹神ヴェリアス様の祝福を受けてエルフは生まれると言われていています。

普通加護を受ける者は、ウイナさんも知っていると思います。が代償を支払う必要があります」

「こくりとウイナはうなずく。

その代償のせいで女性という姿になったらしいので、実感として理解できる。

「しかし、樹神ヴェリアス様はそのような代償を一切必要とせず無償でエルフに加護を与え続けているとされています」

ウイナは彼女の話聞きながら、ふとあることに気付く。

「遙か昔からエルフは、加護を受けその力で大陸で生き延びてきました。

そのため樹神ヴェリアス様に大きな感謝と恩を感じ、崇拜しています。

それゆえに樹神ヴェリアス様から加護を受けられなかった存在は、忌み子としてその存在を区別されます」

そこで言葉を止め、リアはふつと息をはく。

「わたしは、樹神ヴェリアス様に加護を与えていただけなかった忌み子なんです」

力なくリアは笑った。

しばらく沈黙が続き、ウイナはさつき気がついたことを聞いてみた。

「さつきのエルフについての話なんだが」

「はい」

「リアは、その樹神ヴェリアスという種族神について疑っているのか？」

そう。

先ほどからの話はほとんど推定する語尾が多かった。

今の話からするとエルフというのは、その樹神ヴェリアスに対して

絶対といっていいほどの信仰をしてもおかしくない話だ。
なのにリアからはそういう気遣いのようなものがあまり感じられなかった。

一応、尊称をつけてはいたが。

「そう、ですね。」

疑っている……というよりはわからない　という方が正しいかも
しれませんね」

じいっとティーカップの液面を見ながら、リアは言葉を探す。

「樹神ヴェリアス様が、加護を授けたことは本当だと思います。
でも何故エルフだったのか。」

どうして授けられないエルフがいるのか。

樹神ヴェリアス様の姿を見たことがあるものがないのは何故なの
か　」

ティーカップを傾け、一気に喉の奥にお茶を流し込む。

すでに時間が経っているため、冷たくなった液は喉に清涼感を感じ
させる。

「　何故、迫害されるものを助けようとししないのか。」

わたしにはわかりません」

肩をすくめ、力なく笑う。

「わたしは知りたいんです。」

わたしが忌み子として生まれた理由を」

透き通った眼差し。

そこに復讐や、嫌悪そういう負の感情は見られない。

彼女が今まで何を見、何を体験してきたのかはわからないが　。
瞳を濁らせなかったことは奇蹟のように思えた。

「　騎士になるのは、国にある施設を使用するため……か。
図書館とか」

「！よく　わかりましたね」

「話の展開を読んでいればなんとなくな。」

俺も似たような形でその資格を得たからな」

にやりと笑みを浮かべる。

「しかし、それなら何故この国なんだ？」

他の大国にも情報があるんじゃないのか？」

「ウイナさんは記憶喪失だからわからないと思いますけど。」

この国は平等なんです。どんな種族も性別も」

急須に入ったお茶をカップにそそぎながらリアは言う。

「わたしがこの国にきて一番最初に感じたのがそれでした。

普通に様々な種族が店を開き、生活し、騎士と呼ばれる人達を見て
も男女かまい無く、種族も関係なく。

そんな国はここぐらいです」

「他の国ではない……か」

「はい。」

たとえば、帝国は前王の時代、力あるものを登用し力のないものを
切り捨てるといふ体制を続けていましたし。

聖都はエルフが重用されている国であります、忌み子の自分では
迫害の対象になってしまいます。

そして楽園は」

ふっと苦笑い。

「あそこは、多民族の安定を謳っていますがその実、別の物差しで
種族や人を判断する国です」

「消去法的にシルヴァニアにしかありえなかった　　というわけか」

「はい」

ウイナは冷たくなってしまったカップのお茶を口にした。

「さて、これからどうするか」

一応一般的なこととは聞き終わったし、さてこれからということところで
ウイナは疑問を發した。

「そういえば、リアは俺の従者となったんだが学校の方には行かな
なくてもいいのか？」

「はい。あとでウイナさんの印を押してもらおう従者活動証明書の方

を事務の方に提出すれば問題ないです。

もともと3年生になると就職活動がほとんどメインになりますので自主練習の方が多いいんです」

「なるほど。」

「じゃあ明日からでも動けるといいうわけか」

「はい、そうなります。」

「……具体的に騎士として俺はどうしたらいいんだ？」

勝手に動いていいなら勝手に動くが」

「いえ、たぶん騎士団の庁舎に掲示板がありますから、そこで仕事をもらう形になると思います」

「クエスト系のRPGみたいだな」

「くえすと系あるピージーですか？」

不思議そうな表情をするリアに、こっちの話と説明し、

「へえ、面白そうですね」

興味を示された。

「その話はおいておいて、この宿舎もそうだが都市のことも実際見て調べたいな。」

正直どこになにがあるのかわからないのは、ここを守る騎士としてマズいだろう」

助けを求める人を助けにいつて道に迷いましたでは、阿呆もいいところである。

「そうですね……」

リアは、壁際にかけられた時計　　ウイナの元いた世界と同じ時計のようである　　を見、

「……まだお昼にもなっていませんし、出かけてみましょう」

「よろしく頼む」

宿舎を出ると、すぐ大きな通りにぶつかった。

「この通りが英雄通りです。」

名前の由来はあの百日戦争の後、凱旋したミーディ・エイムワード

様が通ったことからそう言われています。」

「右の道のずつと先にあるあの白亜の城が王城か？」

「はい。あと正面にある建物が騎士の庁舎になります。」

あそこで騎士の仕事をしたり、会議に出たりします。」

「あの騎士の庁舎の右にある建物 北側の建物は？」

「あそこは騎士じゃなく、主に内政をする政治人が会議などを行う場所ですね」

「なるほど。」

この新都シルヴァニア王国は、王政なのか？」

「はい。一応その通りなんですけど……」

少々口ごもり、

「このシルヴァニア王国には王様がいないんです」

「は？」

「いえ、政をしているのは【闘神】ミーディ・エイムワード様なんですけど、実はミーディ・エイムワード様以外にも同格の方々がいらつしゃって、その方々も他国でいうところの王に該当するんです」

「つまり、このシルヴァニアには王が複数いる？」

「はい。三人の王が統治していることになっています。」

でも、【闘神】ミーディ・エイムワード様以外の御二方は表舞台にあまりでていらつしゃわないので、国民でも会った方は少ないです。わたしも未だお二方に顔を合わせたこともないですし」

「何をしているのかもわからないのか？」

「はい。ただミーディ・エイムワード様曰くちゃんと仕事はしているとのことですよ。」

「ふむ」

なんとも変な話である。

「どういふ人物なんだ？」

「御一方は、【盲目の巫女】ヘラ・エイムワード様。」

この世界にある全ての靈輝術を扱えると言われている方で、最高位の靈輝術師です。」

この街の結界なども全てヘラ様が靈輝術で編んだものです。ただその人の身を越える技量を身につけるために代償として盲目になってしまわれたと言われています」

「【盲目の巫女】か」

急に日本語っぽい言葉がでてきたなーとウイナは思った。

「もう一方は【人形遣い】シルヴィス・エイムワード様。

人形という特殊な技術を使い、様々なことをなされる方だと聞いております。

この都市の構想や、日常生活を楽しむ案などは全てこの方から発案されているらしいです」

「謎人物か」

「はい。」

でも国民のほとんどはあまり気にしていないそうです。

自分達の生活を守ってくれているのは確かなので」

「なるほど……」

国民にとって、重要なのは生活が出来るか否か。

大多数のものが日々に困らなく生活できていれば、それは善政といえるのだろう。

「……ちなみに政治人になるには、やっぱりミーディ・エイムワード女王陛下の言葉か何かが必要なのか？」

「いえ、政治人の選抜に女王様の意志は入りません。

年に一度選挙があり、生後25年過ぎたものなら誰でも立候補でき、立候補された者から国民全てが選びます」

「当選すると政治人になる、か」

「はい。でもそれで終わりじゃなくて、政治人になっても普通の仕事はつかなければいけません」

「ん？政治人の仕事とは別に違う仕事もするということか？」

「シルヴァニア王国で政治をする人は、同時に何か別の生活するための仕事を持っていなければいけない。そう法律で決められています」

「……もしかすると、政治人には給料が出ない？」
「そうです。」

しかも定時の午後3時まで仕事をし終わってから、この庁舎までやってきて施策などを煮詰めたり、決定したりします。
完全にボランティアですね」

「過酷だな」

「ええ、だから政治人になろうとする人も本当に政治をやりたい方しか集まりません。」

でもそれでいいんじゃないかってわたしは思うんです」

まぶたを下ろして言う彼女の言葉に、ウイナもまた首肯したのだった。

「それじゃあ、次の施設に行きますね」

といい、南の方へと下っていくと大きな円形の広場に出た。

「ここは、エレンテーズ広場です。」

露店や、食事を専門に扱うお店が多く出ています。」

リアの言うとおり、広場には多くの人がいてそれぞれ楽しそうに歓談していたりする。

その中でも種族は多種多様。

「あら、リアちゃんじゃない」

といきなり名前を呼ばれ、リアは振り返る。

そこには猫耳が頭から生えている妙齢の女性がいた。

「カテットさん」

「学校はどうしたの？」

「従者になったので学校の方はお休みですね」

「あら、本当？」

それは良かったわね。」

この子は？」

カテットの斜になった瞳がこちらをとらえる。

ウイナはすっと少し前にでて、

「ウイナ・ルーシュ。」

従者グローリア・ハウンティーズの騎士だ」

「貴女が？」

「……もしかして、貴女女王陛下の加護を受けた娘じゃない？」

「どうやらこの王国には秘密という言葉はないようだ。」

「どういふことなんだとリアに目で訴えると、」

「あの、カテットさん。」

「ウイナさんが女王陛下の加護持ちだっということいつ知ったんですか？」

「わたしでさえ今日の午前中ですよ？」

「ああ、それはね」

「にっこりと笑い、」

「アルバさんが言いふらしていたのよ。」

「うちの店で」

「アルバー……！……！！！！！！」

「う、ウイナさんっ!?!」

突然奇声を上げるウイナに、リアは目を白黒させる。

「すまない。」

「ちょっと持病のしゃくが」

「は、はあ。」

「カテットさん。アルバさんってもしかして【青の大鷹】の？」

「そうよ。」

シルヴァニア王国騎士ランキングの仕事をしなない騎士で上位のアル

バさんよ」

「仕事をしないのか……あのおっさん」

「ぐったりとウイナは呪うようにつぶやく。」

「って、騎士団の仕事はどうしたんだ？」

「アルバさんは、よく仕事を抜けてここに来るから」

「よし、殺そうアイツ」

ウイナはアルバを殺していいリストに名前を載せた。

「それじゃあ、割ともうみんな知ってるんですか？」

「そうじゃないかしら？」

仕事終わったら、夜街にくり出すともうピティウム中には広がるんじゃない？」

「騎士の仕事ってラクなんだな」

遠い目で空を見上げるウィナに、リアは両手を振りながら、「ち、違いますっ。」

そついう自堕落な騎士もいるだけで」

「いや、騎士団長でそれはマズいだろう」

「わたしもそう思いますね」

「ん？」

明らかに3人以外の声がした。

横を見ると、そこにいたのは紅髪ポニーテールの少女。

「リテイだったか？」

「はい。そーですよ」

ぺろぺろとアイスクャンディーらしきものをなめていた。

「あら、リテイちゃん」

「あ、おばちゃんこんにちわー」

身体を傾けながら挨拶するリテイ。

「リテイ……様？もしかして【青の大鷹】の副団長のリテイ・A・シルヴァンスタイン様ですか？」

「お、わたしを知っているんですか？」

有名になったものです」

にやにやと笑う少女。

「おまえも仕事を抜け出してきた口か？」

「いいえ。」

どこかの自堕落団長と一緒にしないでくださいよ」。

わたしはこう見えて」

「……こう見えて？」

「市民の安全と市街の平和を守るパトロールにやってきました」

「……モノはいいようだな」

じろりと横目で見る。

「あとはこれですね」

と胸元から一枚の文書を取り出す。

何故かしわ一つついておらず、A4サイズくらいの用紙が胸の谷間から出てきたことに軽くめまいを覚える。

「……」

目をつぶり、空を見上げ、額に指を押し当てながら息を吐く。

「どうしたんですか？」

「いいや、なんでもない。で？」

「略式ですけど、ウイナさんの騎士証明文書ですね。」

大事に保管しておいてください。あとこれが識別指輪です」

「指輪？」

真珠の指輪？のようなものをリテイから受け取る。

「それがないとシルヴァニア王国の国民と判断されず、結界から弾かれてしまいますので注意してくださいね」。

あとは身分証もかねていますのでそれを係の人に見せれば公共施設も使えます」

「……便利なものだな」

感心するウイナ。

「あ、そうそう。明日騎士庁舎の方に一度顔を見せて欲しいのと」とです。

何でも今後の話があるとか」

「言われなくても行くつもりだったが、誰がいるんだ？」

「統括騎士団長……様ですかねー？」

「何故疑問形なんだ」

「いえ、その時都合の良い方だと思いますよ」。

まあ気長に待っていてくださいいな」

緩い彼女の言動にため息をつき、ウイナはああわかったと了承した。

「じゃあ、わたしはこれで」

本当に用件はそれだけだったのだろう、きびす返し北の方　王城
や、庁舎がある方へ歩いて行った。

しばらく彼女の後ろ姿を見て、

「さて、俺達もそろそろ行くか」

「はい。あ、でも」

広場の中央には巨大な石のオブジェがあり、そこには時計がはめ込まれていた。

その時計の時間をリアは見つめ、

「もうお昼になりますから、食事にしてから行きませんか？」

「……それもそうか」

「なら、リアちゃんもウイナちゃんもこっちでどうかしら？」

「カテットさん」

「う、ウイナちゃん……」

あまり呼ばれたことのない名称に、ウイナは思わず大地に四肢をついた。

「どうしたの？この子」

「はい、あの……ちょっと複雑な事情があるんです」

リアはあははと乾いた笑いをした。

第3話 喫茶店での騒動

カテットさんのお店は喫茶店であった。

といつても出てくる料理は本格的のようで、軽い気持ちで頼んだスパゲティナポリタンもおいしくいただけた。

「……っは。普通に食べていたが何故ここでこんなものが出てくる？」

「何かおかしいですか？」

頭に疑問符を浮かべリアは、聞いてくる。

そういうリアは、カルボナーラを食べていた。

「いや、記憶の方であった食べ物が出てきたから驚いたんだが」

「それって、ウイナさんですか？」

「ああ」

「ずずずずーと口にする。」

「うまいな。専門店並みの味だ」

「あとで聞いてみます？ここの料理について」

「……そうだな。」

「お客が引いてからでも聞こうかな」

ざっと店内を見回す。

人気店なのだろう。

カテットさんの喫茶店の席はほとんど埋め尽くされていて、ウェイトレスにウェイターがところせましと料理を運んだりしていた。

とても時間をとってもらう時間はなさそうだ。

「そういうえば、カテットさんは俺達と話をしているさっき大丈夫だったのか？」

「繁盛店のようだが」

「カテットさんはここのオーナーですから。」

料理する人や、運ぶ人もちゃんといます。

でも忙しい昼時とかは料理の方を手伝っているみたいです」

「なるほど」

そうして注文した料理も平らげ、食後のコーヒーをすすりつつ、ウイナとリアは歓談していた時だった。

「いらっしやいませ ひっ!？」

とウエイトレスの挨拶に、悲鳴が混じったのは。

「っ」

平和な店内に合わない不協和音。

黒い服装に身を包んだ男達 いや女もいるのか、が中へと大きな靴音を鳴らして入って来た。

明らかにその格好や仕草から普通の強盗の類ではないことは理解できた。

「(……強盗団……か。手慣れているな)」

すっと目を細め、入って来た人数や格好、携帯している武器などを観察していく。

店内はすでに先ほどまでの和やかな雰囲気はない。

ただ誰もがこの後何が起きるのか、不安な表情で彼らを見つめていた。

そして店内を制圧する形で人を派遣した後、首謀者がゆっくりと姿を扉から現した。

背の高い男。

黒い服に身をつつんでいてもわかる鍛えられた肉体。

腰に帯びたロングソードでもショートソードでもない長さの剣。

眼光は鋭く、そしてその視線の向け方に余分な動作はない。

ポイントポイントごとに目をくばり、アイサインで仲間達と連携するその技量。

ずずっとコーヒーをすすりながら、

「(……さてどうするか)」

「ウイナさん……」

とリアは小声で声をかけてきた。

「……強盗団っぽいが、制圧部隊 騎士団はすぐ来ると思っか？」

「おそらくそれほどかからないと思います。でも
リアは怪訝な表情を浮かべる。
それについて尋ねようと口を開きかけた時。

「そこのおまえ達。
動くなよ。そしてしゃべるな」
と黒服の男から叱責を受ける。

(……めざといな。
もう少しおおらかに生きられないのかな)
我ながら無茶なことを思いつつ、さてどうすると状況の推移を見守る。

黒服達は喫茶店内の人間を傷つける気はないのだろう。
要所要所に人員をおいていき、動きを封じていく。
彼らの武装は腰に帯びた剣。

黒衣は見た感じは薄い素材のようだが、対刃、対衝撃などの加工が
されているのかもしれない。
やがて準備が整ったのだろう。
首謀者の男が口を開いた。

「我々はこのシルヴァニア王国に革命をもたらすために結成した組織【夜明けの鐘】だ。
シルヴァニア王国との交渉のためにおまえ達にはしばし不自由の身
になってもらう。」

抵抗はするな。

抵抗しなければ、こちらの用事が終わり次第帰そう。

だが、抵抗するようなら
「
腰に帯びた剣を抜き放ち、一閃。

ただそれだけで彼の間合いにある木製の椅子は全て粉碎された。

「こういふことになる。余計なマネはしないことを勧める」
そう大男は言い放った。

「……強いな、あの男」

ウイナはカップに口をつけたまま、つぶやいた。

男はすでに2階へと行ったため、現在1階にいるのはウイナ達とお客に店員、あとはあの男の部下達という状況だ。

店内はそれほど広くはないので、内部にいるのはざっと見て数人。外にも見張りがいるようで何人かが店の周りを巡回している。

そして、2階には首謀者の男と部下達数人。

状況ははつきりいつて詰んでいる。

ちらつと正面に座っているリアを見る。

彼女もこちらを見、すつと懐から出したカードのようなものをこちらに差し出した。

「？」

怪訝な表情を浮かべるウイナに、リアは言葉にはせず唇の動きだけでウイナに意志を伝える。

触・つ・て・く・だ・さ・い。

そう読み取ったウイナは、自然な動作で左手を伸ばしカードに触れた。

『聞こえますか？ウイナさん』

『っ』

脳内に響くリアの声。

彼女の唇は動いていない。

『なるほど、心に直接訴えかけているのか？』

『はい。【思念伝達^{シンパニイ}】と呼ばれる霊輝術です。対象に触れたもの的心に直接働きかける術で、本来の用途は対象にメッセージを残して触れたものに伝えるものなんです。』

『それをリアは術式をいじって応用した』

『です。』

でも応用というのは大げさすぎです。

これくらいなら準騎士団学校にいる生徒なら誰でもできます』

苦笑するリア。

『そう卑下することでもないと思うが　とりあえずこっ都合だな。』

この術は』

『悪巧みするにはもってこいの術です』
くすりと微笑するリア。

なんだかんだいって結構乗り気のようだ。

『人の憩いの場所を奪われてまで、おとなしくしているほどエルフ
できていませんから』

『 そうだな。さっさと片付けて休もうか。

さて、どうするかだが』

『一番いいのは、騎士団にまかせてしまうのがいいと思います』

『まあ、プロにまかせられるのなら一番いいと思うが 』

本来ならプロにまかせて黙っているのが一番いい方法だろう。

しかし、

『カテットさんが連れていかれたからな』

『はい……』

暗い表情をするリア。

そう先ほどの声明のあと、カテットさんのみ大男に連れられて2階
へと姿を消した。

その理由はおそらく客や店員がおかしなマネをしないようにするた
めの牽制。

『シルヴァニア王国との交渉のカードとして使われる かな』

『……はい。そしてもしも交渉のカードとして使われた場合』

『奴等の要望が看過できないものなら、シルヴァニア王国側は問答
無用でカードをないことにする』

『そう、なりますね』

唇を噛みしめるリア。

これは、テロだ。

こちらの命というカードを使い、相手にどれだけの要求を通すのか
という真剣^{ゲーム}試合。

テロリスト達にとって一番いいのは、全ての要求を通すこと。

しかし、対する王国側としては全ての要求を通すなど無理な話。

実質、人質となっている者達を救済するためにある程度は妥協するとは思うが、どうしても妥協できない場合、もしくは交渉が決裂した場合、テロリスト側にとって人質の価値は0になる。

そうなれば今度は逃亡という手段のために使用される駒となることは容易に想像がつく。

その結果、運が良ければ助かるかもしれないが悪ければ死である。

『状況の流れにまかせて傍観。』

ならその対価はカテットさんの命か、俺達の命という理不尽な結果が待ち受けていて、かつ運まかせという判定状況。

動かないってというのは無しだろう。』

『……そうですね。』

でも』

『ああ、どうやってこの包囲網を抜くかも問題か』

外の見張りに、中の見張り。』

中の見張り程度であれば、ウイナ自身どうにかなると考えていた。

うぬばれではなく、それくらいできるだろうという経験則からの結論。

記憶喪失で、ここではない世界で平和に暮らしていたものに戦いの経験などあるわけがない。

しかし、ウイナは感じていた。

微量な雫ではあるが、覚醒してから徐々に身体の内にとまるナニカ。自然に存在しているのに、不自然なそれは意識をすれば実感を得た知識や体験となって自らの血や肉となり身体中をめぐる。

これこそが加護の力の一つだということに。

『何か少しでも注意が引ければ』
動けるのに。

そうウイナが思っていた矢先だった。

加護によって鋭敏となった五感のうち聴覚が何かをとらえた。

それは、風を切る音。

鋭角な形をしたものが、この喫茶店めがけて飛んできているのを理

解した。

『……っ』

急にウイナの表情に緊張の色がはしったことにリアは、

『何か……あつたんですか？』

『何が、こちらにむかつてきている。たぶんこれは』

断定する前にそれはウイナ達がいる窓を突き破り、そのままカウンターへと突き刺さった。

「なんだっ!？」

黒衣の者達が騒ぎ出す。

外で見張りをしていた者達も飛来してきたものの発射地点へと注意を向ける。

ここにきてウイナの待っていた好機がきた。

『あとは頼む』

『っ、ウイナさん!』

リアの言葉は制止。

だが、ウイナはこの好機を逃すわけにはいかなかった。

男であった頃の自分とは明らかに違う思考速度が、一瞬の間に黒衣の者達の場所を完全に知覚し、記憶する。

ウイナは走る。

いや、疾走した。

たった一足、その刹那で黒衣の者達に肉薄し、

「倒れているっ」

「っ」

声とともに足払いをかけ、姿勢を崩したところに手にもっていた鈍器で意識を奪い取る。

100メートルほど離れていた黒衣の者達がこちらの様子に気がつく。

しかし、それは一瞬、瞬く間、刹那遅かった。

「なっ!？」

それでも黒衣の者の1人が声を上げることができたのは、まさしく

経験のたまものだろう。

遠くにいたはずの少女が、瞬間移動してきたかのように自分達の目の前に現れたのだ。

これを驚かずに何を驚くのか。

だが、声を出しただけ、ただその動作のみにしか彼らには許されな
い。

閃く剣閃。

軌跡を見ることはできるのに、彼らは防御することも回避すること
もできずその一撃を身に受けた。

どさっ。

倒れる黒衣の者達。

「!?!」

やはり異変に気付き、こちらに注意を一斉に向ける彼ら。

しかし、注意を向けた先にいるのは自分達の同僚のみ。

倒れ伏している彼らの安否がただわかるだけの光景に、彼らは愕然
とする。

敵が見えないのだ。

いや、それは違う。

彼女　ウイナ・ルーシュは別段特殊なことをしているわけではな
い。

ただ走り、敵を捕捉し、気を失わせる。

ただそれだけのことをしているだけ。

彼らが反応できれば、防御することも回避することも可能だろう。

だが、彼らには見えない。

どさっ。

また1人仲間が大地に伏す。

「!?!」

見ることができない。

どさっ、どさっ!?!

倒れる同僚。

みな一撃の下にひれ伏している。

そして、気がつけば立っているのは彼1人。

そこでようやく彼は気付いた。

50メートルほど離れた地点にいる少女の姿に。

疾走する少女。

彼には見えている。

見えている。

見えている……。

そう視界から彼女は消えてなどいない。

疾走などしていない。

ゆっくりとこちらに向かって、ゆっくりとこちらをとらえて、いつ

のまにか持っていた武器をこちらにむけ放った。

見えている。

彼には見えている。

後はそれをよければいいだけ。

斜め上から彼の頭へと放たれた一撃を躲すには、少しだけ動かせば

いい。

身体を動かせばいいのだ。

しかし、

「!?!」

身体は動かせない。

霊輝術を使用したのかと一瞬疑ったが、そんなものを少女は使用し

てはいない。

必死に身体を動かそうとしても彼の身体は動かない。

そして、あと少しで彼の頭へと直撃するであろう刹那の時。

彼はようやく気付いたのだ。

彼が見ていたのは、記憶。

あまりにも鮮烈で強烈で、一瞬で意識を奪う攻撃は、彼自身何が起

こったのか理解させることなくその意識を奪ってしまった。

それゆえに脳は再度事実を確認するために記憶を再生したのだ。

彼はすでに気絶していた。

それが答えであった。

その事実には思い至り、彼の心はようやく眠ることができた。

「ふう」

息を静かに吐く。

一階にいる黒衣の連中はすでに全員意識を奪っている。
外の方は。

「リアが行ったか……」

窓から見えるのは、霊輝術を行使して優しく戦闘不能にしている彼女の姿があった。

元より外は中よりも人は少ない。

そして意識はカウンターに深々とささっているものを放った者に向かっている。

いくら手練れのものといえども、隙があれば準騎士であるリアにも勝算はある。

彼女の霊輝術の腕がもう少し低いものであれば、彼らも体勢を整え反撃に転ずる余裕もあっただろう。

彼女の霊輝術の腕は、ウイナが想像していたよりも上でありまさしく相棒にふさわしい力量の持ち主であった。

「さて、これで少し時間は稼げるだろう」
階下から2階へと視線を向ける。

2階にいるのは数人の手練れと首謀者にカテットさん。

カテットさんを奪還し、安全な場所に逃げ彼らは騎士団が相手をする。

それが理想だ。

だが、騎士団は未だ来ないし、その間もカテットさんがどうなるかはわからない。

「……行くしかないか」

今よりも現状が悪くなるかもしれない。

反対によくなくなるかもしれない。

ただ言えるのは待っているだけでは、選べないということだけ。ゆえにウイナは進むしか道はなかった。

ぎゅっといつのまにか手に握られていた刀の柄を握りしめる。

「　　そういえば」

ふと右手に柄、左手に鞘を持つていたので刀身でも見てみようかと力を込めるが。「……抜けない？」

うんともすんとも言わない刀。

「ふむ」

今度は柄を強く握り、思いっきり空中で振るう。

鞘は　　ずつついたまま。

どうやら刀身は恥ずかしがり屋なのかもしれない。

「……なわけないか。その辺はあとでリアに聞こう」

そう一時的に納得するとウイナは、階段へと足をかけた。

第4話 喫茶店での騒動 グローリア奮闘編

喫茶店の外。

ざわざわと取り囲む民衆を背にリアの孤軍奮闘は続いていた。

「風よ、巻いて巻いて彼のものを縛れ【風縛巻閃】」
シユレフーレドリュッケン

第3の霊輝術。

彼女の唱和をもって具現し、相手の行動を束縛するように四肢に風の枷が伸びる。

「このっ！」

激昂する黒衣。

しかし、そうやすやすと逃れるレベルの霊輝術を行使した覚えはリアにはなかった。

「っ何故破れないっ!?!」

黒衣の1人が驚き、リアを見る。

余裕があれば答えてあげたいが、残念ながらそこまでの余裕はない。まだ2人ほど目の前にいるのだ。

「……聞いてねえぞ、こんな事情」

「?」

黒衣の1人が眉を跳ね上げて舌打ちする。

「そういうものでしょ?」

と隣の黒衣がいさめる。

どうやらこちらは女性のようだ。

リアは、2人がしゃべっている間も術式を崩さず、新たな構成を練る。

霊輝術は霊素を操ることによって為される術形態。

ならば具体的にどうすれば操ることができるのか?

術者が、起こしたい現象を術式によって表現し、そこに現象を起こす分の霊素を注ぎ込むことで術として為る。

これこそが靈輝術の行使法である。
術式は、人によって様々。

数学のような式を連想するものもいれば、絵画のような絵の具の使い方を連想するものもいる。

なんにせよ、靈輝術の術者が一番最初につまずくのが自身の靈輝術を何としてとらえるのか　ということだ。

これは第4以降の靈輝術全てにあてはまる。

このつまずきを解消するために広く用いられているのが詠唱法である。

創作物などに出てくる魔法使いのキャラが魔法を唱える時に使う呪文を参考にして作られたその方法は靈輝術の行使を飛躍的に楽しめた。

自分が起こしたい現象を表現する言葉を口にすることでイメージは固まりやすく、比較的簡単に術式を編むことができるからだ。

メリットの大きさをゆえに詠唱法は靈輝術を使うもののスタンダードになったが、同時に命題となる。

速く、そして精密な靈輝術の行使法の模索。これこそが靈輝術を研究するものの未だ先の見えない難問となつて彼らを苦しめていた。

そして、グローリア・ハウンティーゼもまたその難問に挑む求道者であった。

「風よ、巻いて巻いて彼のものを縛れ【風縛巻閃】」
シュレラーレドリュッケン

再び同じ靈輝術。

リアの放つた風の枷が彼ら2人へと伸びる。

「そう何度も同じ手にっ」

黒衣の男は手に持つ剣で風の枷を迎撃する。

「っ」

「やられると思うなっ。爆ぜよ、神炎。轟け、俺！【俺的打炎槍】」
シュウエルマー・ヘエンゲン
槍状に収束した靈素は、術式によりその属性を炎へと変化し、灼熱の槍となり発射された。

「っ。【集え滴】」
トロフエン

「こつちも忘れてもらっては困るわ」

黒衣の女もその滑らかな唇を滑らせる。

「彼の者に、氷結の矢の一撃を【氷の矢】」シューネーボーゲン

空中に幾つもの霊素が収束し、術式をもって氷の矢となりリアへと放たれた。

「っ！」

二種類の属性違いの霊輝術。

着弾までは数秒。

回避は不可能。

防ぐには同時に霊輝術を行使するか、属性に左右されない霊輝術を行使するか二つに一つ。

ただ、残存時間の関係上後者は時間的に不可能。

ならば、単属性系の霊輝術を同時行使して防ぐより他はない。

そう覚悟を決めて、リアはだんと一歩前へ足を出す。

「っ！？」

2人は驚愕する。

その無謀さと躊躇のなさに。

しかし。

「【氷の盾】」フリーレンヴェルグ

着弾する瞬間に霊素を収束させ氷属性へと変化。

男の放った炎の槍は一瞬にして蒸発し、空气中に気化した水蒸気が視界を覆う。

「【氷霧】」ネーヘ・ツールレン

「なっ」

「高速詠唱!？」

詠唱のないリアの霊輝術は、水蒸気を一気に固体へと変化させる。

自身へと迫っていた無数の氷の矢もまた空間自体を凍らせる一撃から逃れることは出来ず、そのまま閉じ込められた。

「【破碎せよ(ツェアシュラーゲン)】」

静かに響くリアの声。

氷櫃となった巨大な氷が言葉を合図に砕け散る。

冷気が周囲の温度を低下させ、彼らもまたその寒さに身震いする。

そして、砕けた衝撃で発生した煙を身にまとわせ肉薄するリアの姿を彼らはとらえた。

「ちっ」

男は舌打ち鳴らし、相手を撃ち倒さん勢いで剣を振るう。

「！！アランっ」

非難の声をあげる黒衣の女。

そう彼女の目測では、少女の攻撃はアランには届かず、アランの相手を両断する剣撃の方がわずかに速い。

そうなればいくら治療の高位霊輝術士がいたとしても助からないレベルの怪我を負わせることになる。

これは催しものだ、そんなことは許されない。

しかし

彼女の未来は否定される。

「【疾風】^{シユネル}」

リアの一言によって。

「んなっ」

アランは思わず声を上げた。

肉薄していた少女の姿が、一言とともに消えた。

そして次の瞬間にみぞおちに触れる固い感触。

「【雷撃】^{ブリツッ}」

「がっ!？」

身体にはしるしびれと衝撃。

アランは自らに放たれた力の正体を悟った。

ゼロ距離での雷撃の霊輝術。

いくらアランとてその一撃を生身で防ぐことは不可能だった。

「まじ……かよっ」

納得のいかないまま、アランはそのまま大地に倒れた。

「こんなことが……」

黒衣の女は、目前に起きたことは信じられず茫然と少女を見た。
黄金色に輝く髪に、透き通るような黄金の瞳。

肩を上下させ、乱れた呼吸。

そこで黒衣の女は気づいた。

少女が何をやったのかということに。

「……貴女、【アナタイム霊素変換器】を使わずに、アナタイム霊輝術を行使したわね？
第4、第3レベルの霊輝術を」

「……」

リアは沈黙したまま、彼女を見つめていた。

常識として、【アナタイム霊素変換器】をなしに第4以降の霊輝術の行使は不可能だということになっている。

その言葉が示す通り、実際は少し違う。

霊輝術を使う際に使用するエネルギー、霊素の正体を真実つかめて
いるものはこの世界にはいない。

ただ言えるのは霊素は術式を通すことで様々な現象を引き起こす力
のあるものだということだけだ。

もちろん、現在も霊輝術、霊素については研究はされている。

しかし、その研究の中でも霊素の真髄に至る研究は国によって禁止
されていた。

なぜなら、霊素の真髄を理解するにはそこに人という要素が必ず必
要になり、そしてそれが人にとって不幸を体現することが明確だか
らだ。

霊素の研究は近年まで国々で盛んに行われていた。

だが陽の目を見ることなく、国々で禁止されてしまったその理由、
それこそが霊素が人によって毒だということが事実として証明され
てしまったからだ。

古来から口伝や、伝承として霊素を操る霊輝術の過度の行使は危険
だとされていた。

その理由は謎であり、伝承者達は神々の祝福のちいによって制限されてい

るため、神に逆らつてはいけないと苦言をした。
なぜダメなのか、それを追求するのが人の好奇心であり探求心なの
だろう。

国々で密かに始まった霊輝術、霊素の研究。

その結果は、全て禁忌となり大陸史の闇へと葬られた。
証明されたことは一つ。

霊素は人の肉体や、精神を大きく変貌させる毒だということ。

そしてその実験の副産物として【アナタイム霊素変換器】が登場し、現在に至
る。

「どうなるかわからないのに何故使つたのっ」

敵だというのにこちらの身体に気をかける彼女の言葉。

そこでリアはさっきまで疑っていたことが真実なのかもしれないと、
思い始めた。

「聞いているの？」

「……聞いています。リスクは承知の上です」

「まさか、これが始めてじゃないの。貴女……」

黒衣の女は、顔を青ざめさせ問う。

リアは微笑すること、その質問を返した。

「わたしには必要なんです。力が」

「貴女は……」

「まだ やりますか？」

リアの言葉に、彼女は静かに首を振る。

「前途有望な若者をここで潰すわけにはいかないでしょう」

腰に手をあて、彼女はやれやれとつぶやく。

そして身体や顔を覆っていた黒い布をずると解いていく。

現れたのは立派な銀の鎧。

軽装衣ではあるものの、その銀の鎧の胸部分にリアは注目する。

「やっぱり……そういうことだったんですね」

そこに描かれた紋章。

その意味をよく知っていたリアに彼女達の正体は容易に理解できた。

第5話 喫茶店での騒動 収束編

騒ぎが収束した外とは裏腹に、中ではまだ戦闘が継続していた。

ウィナが2階へと続く階段に足をかけた時、すぐさま上から黒衣の男が顔を出す。

広くない階段の幅。

1人がやっとのスペースにどうみても小柄ではない男が剣を抜き、こちらを威嚇する。

ウィナは嘆息した。

こんな狭い場所で闘うこと自体が間違っているし、その武器のチョイスもいただけない。

右足に力を込め、階段を一気にかけてあがる。

ぶんと重い剣の一撃が、少女を一刀両断する勢いで叩きつけられる。

爆砕する階段。

木片が飛び、一瞬彼の視覚からウィナの姿は消える。

どこだ？

そう男は思ったのだろう、首を振りウィナを探しガンつと後頭部に衝撃がはしる。

「……っな」

意識が遠のく。

階下へと転がっていくさなか、上を見上げ、そこにあった光景をしっかりと覚えた。

黒い布を。

「自分で視覚を遮ってどうする」

呆れながら、ウィナは2階へと上がることに成功した。

「(さて……、どこにいるかだが)」

上にあがったのは1人ではない。

首謀者を含めても数人はいるはずだ。

2階の部屋数は5つ。

どこかの部屋にいるのは間違い無い。

そしてこちらがドアを開ける瞬間を狙って襲撃してくるのも間違い
ないだろう。

(奴らの腰にあったのはほとんど剣だった。つまり剣を振るえるく
らいの広さが無いとそもそも戦闘がしづらい。)

剣を上段に構えて天井に突き刺さりました なんてあほな状況に
なるような連中ではないはずである。

(そこを加味して、広そうな部屋は)

一番奥にある部屋に目を向ける。

部屋を表す表札。

書かれているのは【お得意様限定特別室】。

(……あそこだな)

ウィナは迷うことなく歩を進めた。

ドアの前に立つ。

ノブにて手を触れず、部屋の中の気配を探る。

(……2、3人か)

ピンゴだろう。

ドアは内側にと開くタイプ。

この場合、空いた左側から攻撃が来るか、それともドアを貫通させ
て攻撃が来るかいろいろと考えられる。

ノブに手をかけてドアノブを回せば、音が出てしまう。

その音が合図になって向こうからしてみれば奇襲がしやすい。

(……ふむ)

ならば

お得意様限定特別室。

そう呼ばれている部屋の中に黒衣の男女と首謀者の男、そしてこの喫茶店のオーナーがいた。

「……」
首謀者の男は、瞑想をしているかのように目を閉じ時を待っていた。ドアの前にいる気配はすでに感知している。

彼の仲間達も当然察知しているため、ドアから少し離れたところで開かれるのを待つ。

数刻が過ぎる。

遅い。と黒衣の者達は胸中で疑惑を膨らませる。

いくら慎重で、疑い深い性格の持ち主であってもここまで時間がかりすぎている。

そして1人はあることを思いつく。

向こうはこちらに居ることを悟っている。ならば当然こちらの裏をかこうとするだろう。

この状態で裏をかくとすると。

その結論に思い至ったのは彼だけではなかった。

他の者達も気づき、彼らは互いに顔を合わせ首肯する。

この部屋には、ドアの反対側に窓が存在する。

彼らは自らも動けるように当然、動きやすい場所にいる。

その位置はドアと窓の中央部。

ドアの方を警戒していれば、必然的に背中が窓側に向けられる。

もしも、侵入者が裏をかくなら窓の方からやってくるだろう。

「……」
視線で彼らは話し合い、立ち位置を変える。

首謀者の男は、そのまま壁際へと移り、窓とドアの直線ラインから外れる。

次に他の1人は窓側を警戒し、背中合わせでもう一人がドア側を警戒する。

これでたとえ彼ら2人がやられたとしても、首謀者は余裕をもって対応できる。

そういう判断からの陣形だった。
そして、彼らの判断はある意味正しかった。
バン。

たたき付ける音がしたと思った瞬間、ドア側にいる男の目の前に広がる大きな木製の何か。

「！」

それがドアだと気づき、すぐよけようと回避行動に移る刹那、むぎゆうと彼の後頭部を何かが踏んだ。

その勢いで彼はなすすべなくそのままドアに激突し撃沈。

「セルフ。ちっ！」

倒れた同僚の名前を呼び、すでに気絶していると判断。

すぐさま飛んでくるドアの斜線上から退き、視線を走らせる。

すでに侵入者はこの部屋に入っている。

だが、彼の視界の中に侵入者の姿はない。

「どこへ　がっ!？」

男の動きが止まったまさに瞬間、男は何か後頭部に衝撃を受け、そのまま昏倒した。

「さて、あとはあんただけだ」

侵入者の少女は、にやりと笑いながら鞘のままの刀の切っ先をこちらに向け、言い放った。

「……………団長」

怪訝な表情で、黒衣の女性はそう首謀者の男に問いかける。

「何か行き違いがあるのではないのでしょうか。本部に問い合わせた方が……………」

「いやいい」

女性の提案を退け、男はそのまま一歩踏み込む。

笑っていた少女の顔に緊張がはしる。

2人の間に高まっていく圧力。

すでに2人に会話は無い。

ただ相手を制圧せしめんといい裂帛の気合いだけが、この狭い空間の中でせめぎ合う。

「……暑い」

無意識に首元近くまで覆っている布を引っ張り、空いた隙間に空気を入れる。

時間はまだ数秒くらいしかたっていないのにも関わらず、彼女には数分程度の時間の進みを感じさせた。

そして、何の予告もなく彼らは弾けた！

「はあああああつー！」

「おおおおおおおつー！」

相手へと駆けだしたタイミングは同時。

団長の剣が、空気すら両断する勢いで自分よりも小さな少女へと放たれる。

だが、少女もまたその軌道を読んでいたので、すぐさま鞘から抜いていない刀で迎撃する。

ばぢばぢばぢっ！！

互いの武器が文字通り火花を散らし、衝突する。

「ぬうつうつうつうつうつうつー！」

少女の武器ごと破壊し、そのまま首をとらんばかりに力を込める団長。

しかし、自身よりも幼い少女は全く負けることなく団長の剣勢に対抗する。

それは彼女からしてみれば悪夢であった。

「ぬうつうつうつうつうつうつー！！！！！！」

「はあああああああつー！！！！！！」

拮抗する力と力。

このままいつまで続くのだろうと思っていた矢先、天秤が団長の方へ一気に傾く。

「っ？ぬうつおおおおおつー！！」

やはり少女の幼身で団長の相手は無理だったのだろうか。

油断する気もない、団長の渾身の一撃。

ついにあと数センチもみたないレベルまで剣身が迫る。
がっ！！

団長の剣先が床へとたたき付けられる。

「！！」

少女の姿はないっ いや、いた！

少女は団長の懐に入り込み、胴体を貫かんばかりの勢いで刺突をくり出した。

「団長っ」

彼女は思わず声をあげてしまう。

彼は部下の案ずる声に返答をかえさぬ代わりに、自らの無事を行動で示した。

だんっ！

力強い踏み込み。

同時に少女の視界からその巨体は瞬く間に消え去る。

「！？」

驚く少女。

そう団長は空を飛んだのだ。

床に突き刺さった剣先を支点にして、己が巨体を浮かび上がらせた。まさに団長というものに相応しい技術。

だが、相手が飛んでいることに気付いた少女もまた尋常ではなかった。

すぐさま身を翻して、支点となっている武器を狙い真一文字に刀を振るっ。

必殺の一撃を防いだことは賞賛に値する。だが、それも生き残ればの話。次なる危機を生んだその行動は愚策であると少女は、言い放つかのごとく振り抜く一撃。

しかし、少女の剣撃は止められた。

「！！」

間一髪着地した団長のもう一つのいびつな剣によって、目を大きく見開く少女。

黒髪が揺れ、風の櫛が少女の髪を優しく梳いていく。

「剣砕きの剣……」

「今度はこちらから行くぞ」

二刀を構え、少女へ攻撃を転じる。

「っ」

ひゅっ！

ゆったりとした団長の太剣。

それを苦もなく少女は刀で受け、次の瞬間太剣を弾き、死角からきた団長のもう一つの剣ソードブレイカー 剣砕きの剣を受けとめる。

「確かにおまえは強い」

ぼつりと団長はつぶやく。

空いている太剣を少女へと向ける。

「っ」

「だが性能に技術スキルがついていないっ」

団長の持つ二刀に急速に高まる霊素。

「悪いが、その武器。壊させてもらっぞっ」

それが合図。

【千塵裂空殺】。

縦横無尽に空間へ走る剣撃。

いやそれは、すでに剣の閃光。

風属性の力を得たその剣技は、対象を塵も残さぬほど細かく切り刻む。生物はもちろん鋼すらも。

しかし、

「っ。なるほど斬れぬか」

団長の放った剣技では少女の武器を破壊することはできなかった。

無傷のまま存在を示している。

そしてその結果は少女にとっても意外なものだった。

「……すさまじいな」

呆れ気味に自身の武器を見る少女。

「……己が武器なのに、その強度を知らないのか？」

「あいにくこれはもらいものでね。性能を知るまえにこういう事態になっただけだ」

不服そうにつぶやく少女。

「ふむ。 いや、ここまでか」

団長はそう言うと二刀を鞘へと納刀する。

「 どういう意味だ？」

「それはそこにいるものに聞いた方がいいだろう」

扉の方へ視線を向ける団長に、少女もまたそちらへ視線を向ける。

かつてドアがあつた場所に1人の女性が立っていた。

赤い瞳に赤い髪をポニーテールにした少女。

「リテイ……か」

少しばかり警戒感を示す少女に、団長はふむと声を漏らす。

「正騎士団第5位【青の大鷹】副団長のおまえがここにきた用件は、今回のことか？」

男の言葉は威圧となって少女 リテイ・A・シルヴァンスタインに突き刺さる。

「まあ、そういうことになりますねー」

彼女の方はいたって普通にそう答えた。

「ならば答えてもらおうか。 どうしてこういう事態になったかを」

「手違いです」

切り殺さんとばかりの彼の問いにリテイは、即答した。

「 手違いだと？」

「はい。まさかウイナさん達がこちらにいらっしやると思いませんでしたので。 それを知った時にはすでに訓練が始まっていましたし」

「おまえならそれでもこちらにすぐさま情報をもたらすことができただけではないか？」

詰問する団長に、リテイはやはりあっさりとした。

「いいえ、それはわたしの実力を買いかぶりすぎでしょう。 わたし

はしががない副団長ですよ？一体どうしてわたしが実力があるといっているのかわかりませんが。正騎士団第2位【黒の狼】団長ヴァン・マクドゥーガル様」

「貴女っ！！」

全く悪びれた様子のないリティに、団長　ヴァンの隣にいた黒衣の女性が口を出す。

「やめろ、マレイン」

「しかしっ、団長！」

食い下がる彼女を手で制止し、

「……今回のことを女王陛下は知っているのか？」

「さて、なんのことを言っているのかわりませんが……。ただこの国の女王陛下に知らないことなどありませんよ？こと自分の領地であるこのシルヴァニアで」

「　　そうか」

一瞬だけ目をつぶり、

「マレイン、帰投する。寝ているものを起こせ」

「っ了解しました」

まだ納得がいかないのだろう、キツとリティをにらみつけそのまま階下へとマレインは去って行った。

「で、どういうことなんだ？」

半眼でリティを見る少女　ウイナ。

「簡単にいいいますと、訓練をしているところにウイナさん達がまぎれ、訓練じゃなくて実戦になってしまいましたということですよ」

「ほっ」

まるつきり信じていない表情でウイナは返事をする。

「信じてくれないんですか？」

「経緯は信じるがな」

ウイナは、さつきまで死闘を繰り広げていた相手に声をかける。

「おっさんの方は大丈夫か？」

「……おっさんか。そんなに歳をとっているわけでないが、眉をひそめるヴァン。」

彼は肩をすくめ、

「……気にするな。こちらもおまえとの闘いは胸が躍った」

「そいつはよかった」

ヴァンは、ウイナが持っている刀へ視線をやり、

「……やはり見間違いではなかったか。おまえの持つ剣」

「ああ、これが」

ひょいと思えるように掲げる。

見た目は完全に日本刀と呼ばれる近接武器。

しかしこれは戦闘時もそうだったが、鞘から刀身を覗かせることはなかった。

「名前は知らないんだが……もらいものだ」

「……陛下からか？」

「そうだが？」

ウイナの答えに大きく嘆息し、

「その剣は【赤錆の魔刀】。女王陛下であり【闘神】ミーディ・エームワード様の武器だ」

「赤錆の魔刀……か」

表面には錆びなどない。だとすると内側 刀身部分が錆びているというのだろうか？

ウイナは興味深げに抜けない刀を見つめ、

「これ、俺が使っていていいのか？」

トリテイに尋ねる。

「いいんじゃないありませんか？」

とあっさりと肯定するリテイ。

彼女では話にならないと、ヴァンへと視線をやる。

彼はぴくっと片眉をあげ、

「……どういう経緯でいただいたものだから俺にはわからないが、陛下本人からいただいたものであればいいのではないか？」

と答えを得た。

「そうか」

割と重要だと思っただが、
。そう思いながらウイナはとりあえずは納得しておいた。

さて喫茶店の騒動の経緯はこういうことらしい。

もともとシルヴァニア王国では常に実戦を重視した訓練を数多くこなしているため、訓練自体の日程や規模などといったことを秘密にして唐突に行うことをしているらしい。

そんな訓練であるため、騎士達はもちろんだが国民にも訓練なのか本当なのかがわからず、究めて真剣味のある訓練として経験が accrue する。

当初、商人組合やら騎士達、国民代表の者達から苦情や反対意見が相次いだらしいが、女王陛下ミーディ・エイムワードが一喝。

「有事がいつ来るなど誰にもわからないでしょ？いつ来るかわからないことを訓練するには、訓練自体もいつあるかわからないものになければ意味がないわ」

それでも食い下がる彼らに対し、

「混乱も起きるでしょう。経済活動にも支障がでるでしょう。でも、それがどうしたのかしら？本当に起こったらそんなものではすまないのよ？」

それとも起きないとも思っているのかしら？」

と挑戦的な物言い、

「平和は永遠に続くものではないわよ？いつ天秤が崩れるかは誰にもわからない。それこそわたしにもね。

訓練せずに過ごしてその時を迎えるのもいいでしょう。

その時、後悔へとつながらなければ」

と続けて、

「何もやらなかったことに対する後悔は、万全を尽くしてした後悔よりも心に重くしこりのように残るわよ？」

忘れていたかもしれないけど、わたしは王。王には国民を守る責任があるわ。だから問おう、あなた達に。

私利私欲に走り、全てを失うのがいいのか、それとも一時の損失を受入、全てを失うことにならないように奔走するか。どちらがいいかしら？」

などと語ったそうだ。

これにより反対派は沈黙。

その後、ミーディ・エイムワードが提唱した訓練が現在も受け継がれている。

喫茶店での騒動もその一貫らしい。

「話の筋は通るが……ね」

ウイナは、グローリアと共に帰宅の途についていた。

「もしかしたらと思っていたんですが……」

気付かなくてすみませんとグローリアは謝罪する。

「別に気にしなくてもいいさ。どのみちアレはおそらく避けては通れなかったんだろうし」

「？」

怪訝な表情を浮かべる彼女にウイナは、

「そういえば、そっちは大丈夫だったのか？」

「あ、はい。ぎりぎりでしたけど、なんとかかりました」

苦笑いを浮かべるグローリア。

すつとウイナの手が彼女の頬をなでる。

「っ、ウイナさん……？」

「少し、顔色が悪い気がするが……」

「……。問題ないです。大丈夫です」

につこりと微笑む。

「……ならいいが」

釈然としないものの、引き下がるウイナ。

「あの、都市の観光はどうしますか？」

「もうこんな時間だから、明日ってところか」

やれやれと肩をすくめる。

喫茶店での騒動後、未活動だが騎士であるウイナとその従者グロリアが騒動を納めたということで参加者全員のミーディングに強制参加させられた。

ミーディングの内容はいたって真面目で、襲撃者側、対抗する側が各自の問題点や改善点を言い合い、本番に備えるといったもの。

大抵は、騎士団ややってきて解決するのが常道らしく、まさか2人で制圧されるとは思っていなかったようだ。

特殊な事例ということもあり、今回は舌戦を繰り広げつつようやく先ほど会議が終わったところである。

「ウイナさん夕食はどうしますか？宿舎の方に食堂はありますが」「ならそこでとるかな。さすがにいろいろあつて今日は疲れたよ」「うーんと腕を伸ばし、肩を伸ばし、軽いストレッチをする。

「なら一時間後、ウイナさんの部屋にわたしがいきますから、一緒にいきませんか？」

「……そうだな。よろしく頼む」

第6話 彼女の秘密

そうして何事もなく宿舍に戻り、ウィナとグローリアはその場で別れ、各々部屋でと戻った。

「はたん、と後ろ手でドアを閉め、グローリアは右手で口元を覆う。

「うふっ」

小さくうめき、ずっと口元の手を外すと、真っ白な手にはにつかない赤い液体がついていた。

「……まだ、倒れるわけにはいかない」

自身の症状の原因はわかっている。

霊輝術　　霊素を操る術の操作で、本来は【アナタイム霊素変換器】を使用しなければいけないところを生身で行使した結果だ。

【アナタイム霊素変換器】をわざと使用しないメリットは、その速度と制御の上昇にある。

最初は、事故だった。

魔物との闘いで、【アナタイム霊素変換器】である杖をはじき飛ばされ、死に直面した際に思わずそのまま霊輝術を行使した。

結果、霊輝術は発動した。

しかも普段自分が使用する霊輝術よりも速度も制御も超えて。

だが、同時に意識を失った。

再び気がついた時には病院のベッドにいて、そこで霊素の危険性について教師から教えられる。

本来は騎士になってから教えられる内容は、グローリアにとって転機となった。

その時彼女は、壁にぶち当たっていた。

彼女には目的がある。その目的の達成には治癒の霊輝術と、攻撃系もしくは結界といった霊輝術の行使能力の向上が必須であった。

独学では現界があり、そのためにエルフ種族であっても偏見の少ないこのシルヴァニア王国にやってきた。

靈輝術を学ぶには、靈輝術を専門に研究する機関の世話になるのが一番早い。だが、そこにいくにはそれなりの成果が必要だ。簡単に言えば、騎士の称号のような。

そうして彼女は準騎士団学校へ入学した。将来騎士として働くことを前提とした講義内容は、グローリアにとって宝の山だった。

しかも準騎士であることは証明書としても使え、大陸でも有数の蔵書を誇る図書館などの公的施設も優先的に使用できた。靈輝術の上達は急上昇。

ついには個人では入手が難しい、【アナタイム靈素変換器】も授与され目的の達成も時間の問題。

そんなときにつまづいたのが、才能という名の限界だった。

治癒や、結界などといった靈輝術の適正は高く問題なかったのだが、攻撃系の靈輝術の適正が低く、今もなお第4から第3へ到達できないのだ。

それに適正があった治癒や結界もまた、彼女の目的を達成するにはまだ満たないレベル。

様々な方法を試したものの、成果は上がらずできないことがより明確になっていっただけの数年。

最上級生となり、あとは騎士となって靈輝術の研究機関への就職をなんとか成功させるしかないかと思っていた矢先の事故。

その日から早速、彼女は靈輝術の生身での行使を始めた。

そもそも第5の靈輝術に関しては生身で行使できるのだから、第4以上も行使する分には問題がないはずなのだ。

それが自身の身体に影響があるかいなかの問題だけで。

自身を実験材料にしてグローリアは準騎士ではあり得ないレベルの靈輝術行使能力を身につけることになる。

「でも、まだ足りない……」

そう目的達成まで未だ足りず。

足がかりはできた。しかし、その道程ははたしなく遠い。

もう少しで何かをつかめる時点まではきている。

ここから先は自身の命がつきるのが先か、習得し目的を達成するのが先か。

「ふう」

天井を見上げる。

血で少しばかり塞がれていた気道に隙間があき、その間から新鮮な空気が肺へと送られる。

背はドアに。

両手はだらりと垂らし、ずるずるとそのままぺたんとお尻を床につけた。

「……もう、少し か」

そのままの姿勢でグローリアは意識を手放した。

第7話 赤錆の魔刀と使用方法

同刻。

ウイナはベッドの上に座り、今日一日のことを振り返っていた。

朝から今まで様々なことがあり、それなりに疲れてはいたが、気持ちのいい疲れであった。

記憶のあるものと照合してもこちらの生活の方がどうやら自分にあっているようだ。

不意に手首をぐるりと回し空中で何かを掴む動作をする。

と、何もない空間が歪み1本の刀が顕在化した。

「ふむ」

喫茶店で使っていた武器であり、女王陛下の贈り物。

それを抜こうと鞘と柄、両方に力をこめ引っ張る。

「抜けないな、これ」

やはり刀身を見ることはできず。

接着剤でもつけたかのようにぴっちりとくっついているようだ。

「力では無理……っていうところなんだろうな、たぶん」

よく物語であるように、資格なきものうんたらかんとらとか、窮地の時にうんたらかんとらとかそういうものなのかもしれない。

「打撃武器としては優秀だから問題ないか」

なにせあの喫茶店で、猛者の持つ武器と相対しても傷一つつかない代物だ。

強引な使い方しても壊れることはないだろう。

しかも収納は一瞬。

頭の中で収納と考えれば、刀は一瞬にして大気に解け消える。

不思議武器である。

ウイナの常識からしてみれば、信じられないものなのだが、この世界にはもっ

と信じられない魔法のような力もある。

収納できる武器くらいで驚くには値しないのだ。

「さて、どうするか」

グローリアがくるまでまだまだ時間がある。

しかし、どこかに行くには足りない時間。

せっかくだから部屋の中を探検するか、そう考えウイナは歩き回って見ることにした。

にした。

「ここはトイレか……どう見てもこれは」

陶器性だがボタンがあり、どこからどう見ても記憶にある世界にあった水洗トイレである。

「霊輝術で作動するのか？となると、霊輝術っていうのは電気みたいなものなのかな？」

小首を傾げながら、横を見ると引き戸がありお風呂もある。

どうやらお風呂とトイレが一体型タイプのようだ。

ウイナは正直あまりこの手のタイプはすきではない。

自分1人なら問題ないが、自分以外の人がいる場合トイレとお風呂のタイミン

グが重なる心配があるからだ。

実際はそれほど問題ないのかもしれないが、少しばかりイヤな感じがするウイ

ナである。

キッチンはない。

部屋で火を起こすのは危険だからということ、共同になっているあと共同浴場というものもあるそうで、そこはかなり広いとのこと。もしかして温泉とかあるのか？と少しうきうきしながらウイナはい

つかいつて

みようと心の中で決めていた。

部屋の広さは1ルームくらいなので、少しあるいただけで反対側についてしま

う。

元からある木製のボックスや、窓のところにおいてある謎の人形なども興味深い。

い。

「……本でも買ってくるかな。その前に服か」

下着やら上着やらなんやら初期投資はかなり厳しくなりそうだ。

そして1ルームにしては珍しく幅を利かせているクローゼットをおもむろに開

けてみた。

「……」

クローゼットの中には、騎士としての標準服らしいものが2着あり、それ以外

に物は何もなかった。

そ…う…物…は…

ずずっとどこからみたような円柱型の容器から麵をすすする女性がそこにいただ

け。

ばたん。

ウイナは扉を閉じた。

「」

目をつぶり、思考する。

（あれか、今はやりの座敷童というヤツか？）

首を横に振る。

（アレを座敷童などといったら、座敷童が可哀相だ）

すぐに否定する。

一瞬の邂逅だったが、そこにいたのが誰だったかすぐ理解できた。

もう一度確認するために、扉を開く。

「」

そこには七輪のようなもので一匹の長い魚を焼いている女性の姿が。

「阿呆かつ!!」

ウイナは神速の勢いで刀を顕在化し、彼女の頭に振り下ろした。

「ウイナさん、ドメスティックバイオレンスって知っていますか？
漫画のような大きなたんこぶを頭の上に置き、赤い髪の少女が口を
とがらせ
る。」

「不法侵入って言葉を知っているか？」
にっこりと笑ってウイナ。

すみませんと、あつさりと土下座する赤い髪の少女。

「で、一体何なんだ？」

そう赤い髪の少女　リティ・A・シルヴァンスタインを半眼で見
る。

服装は先ほどの騎士っぽい衣ではなく、なにやらわけのわからない
デザインの
首もとから膝上までの長袖の着衣。

厚手の衣でそこからはえる足は素足ではなく黒いストッキングのよ
うなものを

身につけていた。

そんな彼女はウイナの問いに、

「魚のおいしい季節だったので魚を焼いていたんですよ」

「違うから。そんなこと聞いてないから」

ダメだしするウイナに、リティはノリが悪いというので、刀を呼び
出してばか

ーんと叩いておいた。

「いたづ。ウイナさん、何度もぽこぽこ叩かないでくださいよ。」

バカになっ

ちやうじやないですか」

「もう手遅れだろう」

「ひどっ!？」

漫才のようなやり取りのあと、ウィナは嘆息し用件を再度聞いた。

「で一体わざわざ何の用だ？」

「赤錆の魔刀についてご教授しにきました」

語尾にアクセントをおきながら言うリティに少しばかりいらったときた。

「それは助かるな」

「そういつつ、ウィナさんの顔は何故か険しいのでしたまる」

「そういう言い方をしていると手元が狂うやもしれないな」

ぶんぶんと赤錆の魔刀を振る。

「……」

「……」

互いに沈黙し。

「それじゃあ説明しますね」

リティは何事もなかったかのように説明を始めた。

「さつき言ったことですが、ウィナさんの持つ刀の名称は赤錆の魔

刀と呼ばれる、女王陛下の武器です」

「何故かそれを譲られたが」

「女王陛下には女王陛下の考えがあるんでしょう。 たぶん。」

テキトーである。

「赤錆の魔刀と言われる由縁は、その刀身が赤く錆びていることから言われています。実際本当に錆びているわけじゃなくそれっぽく見えることから言われていますが、まああまり気にしなくてもいいことです」

「抜けない理由は？」

「認めてもらっていないから　というのがふぁんたじーっぽいですよね？」

にやりと笑う彼女に、

「真実は？」

表情を変えず、問い返す。

むうとリティは唸りつつ、

「【位】を上げること。それが条件です」

「【位】？」

「赤錆の魔刀は言うに及ばず、この大陸には不思議道具が幾つかあります。例えばあらゆるものの支配が可能と言われる【王杓】、全ての知が記された【原書】、死者すらも生き返らせることができる言われる【聖者の杯】、万物全てを切り裂くことができる【法の朱筆】。このほかにもあるこのような道具は、普通のものには使うことすらできません。

必要なのは魂の位。少なくとも神の頂に半歩分だけでも踏み込んでいないと使用ができないのです」

「……………つまり、種族神でなくてはいけない　というわけか？」
「平たく言うとそうなります。」

考えてみてください。例えば全ての知が記された【原書】があったとして、そんなものを普通の人間が触って知識を得ようとした時どうなりますか？」

「パンクするだろうな。制御ができなければ」

「グッドです。そして、制御ができればという部分ですが普通の人にはやはり無理です。なぜなら、制御の仕方を覚える前に致死量の情報が脳へと注ぎ込まれ情報過多で脳内のブレーカーが灼け落ちてしまい、そのままジエンドです」

「なるほど」

「大陸史でもたまに出てきたりしますが、大抵の持ち主は発狂して死んでいますねー。」

あはは困っちゃいますねーと、決して笑うところでない場所で敢えて笑ってみせるのがリティクオリティ。

「で、その魂の位を上げるにはどうしたらいい？」

「ウイナさんに限って言えば、加護者との対面でいけると思っていますよ」

「俺に限って言えば？」

「ええつとですわね。加護を受けているということは、その種族神の影響を受けているわけです。ということは、すでに加護を受けているというだけで人というカテゴリーからすでに外れているわけですよ。神側に天秤が傾いているような感じですね。

そして加護を授けている存在は、加護を受けている人間が増長、暴走しないように力に制限をかけています。その制限を外すために対面が必要で、物理的に会いにいかなくとも精神側でつながっていますので、そちらで呼びかけてもらえれば応じてくれるはずですよ」

「……つまり、俺の場合はミーディ・エイムワードとの対面で許可を得ないと赤錆の魔刀を抜くことができない　というわけか」

「です」

「ちなみに抜くとどうなるんだ？」

「何でも斬れると聞きますよ？」

「何でも……ねえ」

腕を組みながら、ウイナはうさんくさげに刀を見る。

「本当に何でも斬れるなら面白いが、大抵の場合はタネがある。違つかね？」

「現実主義ですわね。」

その回答はウイナさんがソレを使ってみればわかると思いますよ？」

「それもそうだな」

うなずき、赤錆の魔刀を消す。

「あれ、今やらないんですか？」

せつかく情報教えたのにと頬を膨らませるリティ。

「リアと待ち合わせもしているからな。あとでやるさ」

「そうですね……。むっ」

「不都合でもあるのか？」

「いいえ、単純にわたしの暇つぶしができなくなって残念だな」と

「そうか、ならさつさと帰れ」

「ヒドっ!？ 問答無用ですかっ!！」

ぶーぶー文句を言うリテイにウイナは半眼で、

「おまえの存在は俺の精神状態に悪い。だから帰れ」

「はつきり言いすぎですよっ!？ この人っ」

などとじゃれあっていると、トントンとノックの音がして、

「ウイナさん、グローリアです」

と先ほどまで一緒にいた従者の少女が来訪した。

「そうか、もうそんな時間か」

思ったよりも時間が過ぎていることに驚きつつ、彼女の訪問を歓迎した。

中に入ってくるなり、リアは部屋にいるのがウイナだけではないことに身体を緊張させ、

「リテイ様」

「様はいらないよ、グロちゃん」

「ぐ、グロちゃん!？」

リアは顔を引きつらせ、リテイを見る。

「グローリア・ハウンティーゼって名前だから、略してグロちゃん。

あ、もしかしてグロたんの方がよかった？」

「いえいえいえいえいえいえいえいえいえいえいえいえいえっ」

頭をぶんぶん左右に振って、リアは否定した。

これ以上厄介なあだ名をつけられてたまるかと思っっているのだろう。

ウイナは半眼で、

「リテイ」

「なんですか？」

「おまえに名前のセンスはないな」

「ひどっ!？」

ウイナの言葉に、リアもまた口にはしないものの目で肯定を示したのだった。

第8話 疑惑

宿舎の1Fにある食堂。

ちようど定時近いせいか、ちらほらと人が集まってきていた。

「思ったよりも広いな」

「この宿舎には独身者が多いからだと思います。それに騎士ばかりではなく準

騎士もここを使わせてもらっているので」

隣に歩くリアが捕捉する。

「なに食べようかなー」

と、全くこちらの話には興味なしでメニューを見るリテイ。

「……アレ、なんでいるんだ？」

「さ、さあ。わたしにはなにやら……」

苦笑いを浮かべているリア。

リテイは【蒼の大鷹】という序列第5位の騎士団の副団長である。

立場的にま

だ従者であるグローリアからしてみれば、いろいろと困るのだが。

当の本人はなんやそのといった様子で、メニューを熱心にポニーテールをぴこ

ぴこ振り回しながら凝視していた。

ウイナはとりあえず、目の前の生物を無視することにした。

精神衛生上に悪いし。

「おすすめは？」

「あ、はい。今日はクロウオの焼いたものと、スコット茸のバター焼き、あと

薬剤草のスープに鶏肉の香辛料焼きみたいですね」

「おいしそうだな。それにしよう」

「わたしは……軽めにします」

リアはその隣にある女性用定食というのをチョイスした。
ちなみにこの食堂は食券制。

食券を販売しているおばちゃんから食券を購入し、出来上がり品が出てくる場

所にて待つ形だ。

「席はあそこが空いているな」

ウィナはいち早く3人くらい座れる席を見つけると、そのままそっちへ向かった。

そのあとをグローリアがついていく。

そうして席につき、早速食べようとすると、

「そういえば、リティはどこにいった？」

「……そういえば」

リアも精神的に無視をしていたのか、リティの存在がないことに今気付く。

「まあ、あいつのことだからいつか来るだろう。先に食べよう」

「はい」

食事を始めようとした矢先。

「最近、ウィナさんの扱いがヒドいと感じているリティです……」

どんよりとした空気を背負い、静かに席につくリティ。

どんとテーブルに置かれたのは、ラーメンのようなものに、カレーのようなもの

の。そしてスシのようなものと組合せが炭水化物おんりー。

まだ食べてもいないのに胸焼けをしそうだ。

「ずいぶんと食べるな……」

「食事はエネルギーですよー。」

しっかり食べないと」

もきゅもきゅと頬を膨らませながら食べる姿はハムスター。

しかし、その戦闘能力はクマのような感じだろうが。

「副団長……か。」

「気になりますか？」

「強いんだろ？少なくとも俺よりは」

「さてさて、勝負は時の運。強者が必ず勝てるなら、弱者はずっと虐げられ続

けなければいけませんよ？」

言外に単純に勝利というのは決まるものではないと言っリテイ。

そのことには一理あるとウイナは肩をすくめる。

「まあな。リテイは忙しいのか？」

「一応それなりですねー。うちのところの団長はものぐさですから、事務仕事

を全部こちらにまかせようとするんですよー」

困りますねーといいつつ、ラーメンのようなものに入っているチャ
ーシユをが

ぶり。

「事務仕事……」

ふっと脳裏に閃く。

アルバ・トイックとの会話をしていた時に見た書類の山。

あれをアルバは自分の仕事といていたことに気がつく。

「むしろ、おまえがアルバにおしつけているんじゃないのか？」
じろりと見る。

「いやー、ここの食堂のラーメンはおいしーなー」

こちらのフリを無視し、ずるずるとラーメンを食べるリテイ。

どうやら確信犯のようだ。

ウイナは短い間だが、リテイに対しての評価をさらに下へと修正し
た。

「しかし、騎士か」

「？どうしましたか？」

「いや、まさか騎士になんてなるとは思ってもみなかったなと思っ
てね」

男性として、戦争なんてどこか遠いところで行っているような平和

な時代。

そこで生活をしてきたものにとって騎士などまさに夢物語。

そんな生活をこれからすることに、少しばかり感傷的になった。

(……といっても、これが本当に自分の記憶かどうかも怪しいが)よくある話だが、記憶と記録は違うというヤツである。

自分が誰だかわからないものにとって、いくら自分がかつてこうだったと言われたりしてもそれに実感がわからなければ物語と変わらない。

男性だったというのは記憶にある。

だが、それが本当なのかという実感が無い。

つまりこの記憶だと思っっているものが実は記録でしかないのかも無い。

そう考えれば随分とつじつまがあう。

いきなりだが、ウイナが身につけているものは全て女性ものである。民族衣装のような上着に、赤いスカート、そして黒のストッキング。下着関係もまたそうなのだが。

不自然なことに身につけていることに違和感はなく、そして身体が覚えているかのように下着を身につけたことに愕然とした。

男性の時に女装趣味があつて慣れていた　と一瞬考えたが、それにしてはおかしかった。

そう、おかしいのだ。

こんな異世界に来ているのにもかかわらず、拒絶反応が起きない。まるでここに女性として住んでいたと考えた方が通るのだ。

「……真相はまだ闇の中　か」

「?何かいいました?」

聞いてくるリテイに「いや」と答え、鶏肉を口へとはこんだ。

第9話 気になるあの子はどこの子？

翌日。

「うーん」

窓から降り注ぐ朝日を身体全体で浴びて、上半身だけ起こした身体を伸ばす。

「ふむ」

キレがいい。

自分が思っている通りに身体が動いてくる感覚。

これは何よりも幸運なことだろう。

どこからも異常はなく、体調は万全。

あとは。

「……月に一度くるのが軽いことを祈ろう」

自分としては経験はないが、昨日までのことを考えると実はすでに経験していたなどということもある。

そうであればそれほど取り乱すこともないだろうと思いつつ、顔を洗いに共同の水場へと向かった。

共同といいながらも、水場に男性の姿はない。

というのもこの宿舎、階層によって男性、女性と別れているためである。

そんな理由もあつてか、同性ゆえの着崩れを起こす女性達が非常に多い。

元男性であるウィナからしてみれば、大層動揺が見られる場面ではあるのだが。

「……感じないものだな」

特に気持ちの動きはない。

枯れているとみるべきか、それとも違う理由があると思うべきか。

何はともあれ、おしゃべりをしている女性達の横を通り抜け、空いている場所で顔を洗うことにする。

どうやらこの辺は記憶にある世界と同じで、蛇口から水が出る仕組みのようだ。

蛇口をゆるめ、水を出し2、3ぱしゃぱしゃと顔を洗い、タオルで拭く。

水はほどよく冷たく、しゃっきりする。

ふと少し上の方を見ると、そこには鏡が備え付けられていて他の女性達は髪をとかしたり、髪型を決めたりなどしていた。

ウイナはふむとくるくると自分の格好を見回し、

「特に問題ないな」

と納得しその場を去ろうとすると、

「問題あるよっ!!」

と謎の少女に呼び止められた。

「……誰だ？」

茶色系の髪とオレンジ系の瞳が印象的な彼女は、その小柄で胸を張りびしつとこちらに指を差していた。

「準騎士団学校三年ディアーナ・オルブラント。人は、わたしを鮮血の魔女という」

ふつとニヒルな笑みを浮かべる少女。

どうやらあまり付き合いたくない人種のようだ。

「そうか」

ウイナは何も見なかったにして、くるりと背を向ける。

が、向いた先に少女は瞬時に回り込む。

「……」

「知らなかった？大魔王からは逃れられないんだよ」

中二的な台詞を言う少女。

周りもこちらのやり取りに気付いたのだろう、なんだなんだと2人に注視する。

「……あなた、さつきは鮮血の魔女と言わなかったか？いつから大魔王になったんだ？」

呆れながら尋ねる。

なんとなく逃げた方が厄介なことになりそうな予感がした。

少女は待つてましたといわんばかりに満面に微笑むと、

「大魔王は自称したときから大魔王なのさっ」

いろいろとダメな答えを返してきた。

どうやら本格的にお付き合いを考えた方がいいタイプらしい。

さてどうしたものかと考えていると、少女のターンが始まった。

「ちゃんと髪をとかさないとダメだよ」

「一応、簡単にはとかしたぞ？」

「違う違うっ！！それだけ綺麗な髪なんだから、もっと丁寧にやらないと。いい？ちよつと貸して」

少女は強引に櫛をもち、ウイナの髪をさあつと梳かす。

頭の上から、下まで途中でひっかかることなくすつと流れる様子に他の女性達も興味津々に見つめてくる。

そういうことで注目を受けることになれていないウイナの頬は少しばかり朱色がさしていた。

そうして数十分が経ち、ようやくウイナは彼女から解放される。

「うん、これでいいでしょう」

少女はやりきったぜと男前な表情で、ウイナに感じはどうだと聞いた。

彼女の方とえば、やられている最中は気持ちよくそのまま寝入りそうだったと素直に答えた。

「ならばっちりだよっ！！美容院をやっている両親の娘としてその無精は許せなかったのさっ！！」

満面に笑みを浮かべ、少女は去って行った。

「……一体なんだっただ？」

感謝はしているものの、いまいちよくわからない少女の行動にウイナは小首を傾げた。

「ウイナさん」

朝食をやはり食堂でとっていると、リアがやってきた。

「隣いいですか？」

きちんと聞いてくるところがリアらしいと苦笑しながら勧める。

「夜は眠れました？」

「ああ、問題ない」

「良かったです」

微笑み、リアは隣の席につく。

「ウイナさんは、パンですか？」

「ああ、パンにウインナーやら卵やらのったプレートにしてみた。

正直、食生活に対して心配は杞憂だったな」

「似ているんですか」

「まあな。といっても使われている素材は違うだろうが」

がぶつとウインナーをかぶりつく。

ぷしゅつと肉汁が飛び出る、その旨さに舌鼓を打つ。

「うまいなー」

思わず顔をほころばせるウイナに、リアはつられて笑みを浮かべる。

これからのことを話しつつ、食事も終盤。

ウイナはコーヒーのようなものを口にし、リアは紅茶をしたしむ。

そついえばと朝、謎の少女にあつたとリアへ話をした。

「謎の少女……ですか？」

「謎っていつても名前や所属を言っていたから、謎ではなかったんだがな」

「その少女が何かウイナさんにしたんですか？」

「髪をちゃんと梳いてないことに腹をたてたらしい。」

苦笑するウイナに、渋面のリア。

「でも、ウイナさんは女性の記憶がないわけですから仕方ないのに」

「こつちの事情は向こうは知らないさ。ま、イヤだったわけじゃないし別に気にしてない」

「はあ。でも誰だろう。そんなことをする子って限られてるけど…

…」

いつもの敬語はなりを潜めるリア。

どうやら自分の思索に没頭しているようだ。

「コーヒーをすすりつつ、ウイナは、

「リア。俺に敬語を使うのをやめないか？」

「いえいえ。そういうわけにはいきません。わたしはあくまでウイナさんの従者なんですから」

とお堅い回答が返ってくる。

どうやらまだまだ彼女の堅さがとれることはなさそうである。

「……あ、そういえばウイナさん。その子の名前聞いていたんですよね？なんていう名前ですか？」

口元からカップを外し、ウイナはああと答え、その名前を口にしました。「確か……『準騎士団学校三年ディアーナ・オルブラント。人は、わたしを鮮血の魔女という』とか言っていたな」

「ごほっ!？」

リアはいきなり咽せた。

ごほっごほっ と猛烈に咳き込んだので、ウイナは背中をさすった。

「大丈夫か？」

「ごほっ、だ、大丈夫です……」

落ち着いてきたのを確認し、ハンカチを取り出すがリアはわたしもありますと、答え口元をぬぐった。

「すいません。ちょっと予想外の名前が出てきたので取り乱しました……。でもある意味想定内だったといえ、そうなんですけど」困った顔をするリア。

「知り合い……か？」

ウイナの言葉に、リアは少し逡巡した後、はいと肯定した。

「同じクラスで、わたしと同じく騎士を目指す子です。」

「へえ、なるほど……」

ウイナは片目を閉じ、あの少女は騎士になり活躍する姿を脳裏に思い浮かべる。

「……なんとというかいろいろな意味で評判の騎士になりそうだな」

「……たぶん、そうだと思います」

沈痛な面持ちで答えるリア。

「その子は、就職は？」

「はい。確か騎士団の幾つかで内定をもらっています。ディアーナはああ見えても天才ですから」

まあ、天災とも言っていますが。とぼそりとつぶやく。

「でも、考えてみれば彼女くらいしか想像できませんね。ウィナさんに突っかかるのは」

「？そうか？」

不思議そうな顔をするウィナに、リアは微笑みながら、

「はい、あの子の目はどこまでも”平等”ですから」

第10話 最初の依頼はメイドさん？

朝食が終わったあと、支度をして向かいにある庁舎へと向かう。ウイナとシアは共に騎士の礼服を身に纏っていた。

騎士の礼服 男女で違いはあるが、朱色を基調にしたもので女性はスカートに白のストッキングと規定で決められていた。

金色の刺繍が美しく、デザインも騎士のものとしては見栄えがいいこともあり服装の面からも騎士になりたいと思うものが意外に多い庁舎の中に入ると、正面すぐにカウンターがありそこに数人の女性がいた。

「どうやら受付のようである。」

「どんな御用ですか？」

「先日、騎士となったウイナ・ルーシュだ。ここに来るように言われたんだが」

「っ！貴女が……。」

一瞬目を見開くもののすぐ表情を戻し、

「かしこまりました。こちらを」

と出してきたのは一枚の紙。

「……これは？」

「これから騎士の職務を全うしていただくための仕事になります」

「ふむ。……護衛任務 か。」

「護衛 ですか？外ですか？中ですか？」

「中心都市ピティウムの、お偉いさん……なのか？が狙われているようだな」

仕事内容を確認していると、受付の女性が注意して欲しいのですが
「と言い、

「期限は一週間となっています。その間、依頼者を護衛していただきます。もしも自身の手には負えないようであればこちらに連絡ください。人員を選抜して対応させていただきます。」

「ペナルティはあるのか？」

「成績の方は少しばかり減点させていただくことになります」
騎士の成績のみ響くようである。

ウィナの感覚からしてみると、随分と緩いと感じられた。

受付嬢もウィナがそう考えたであろうと予測したのか、言葉を追加する。

「ただし、それが意図的に起こされたものであったり、もしくは意欲が全く無いなどが見受けられましたら即特殊規定を適用し、騎士の資格を剥奪、悪質である場合は処刑もありえますのでご注意ください」

「……なるほど」

しっかりとしているようである。

受付嬢に挨拶をし、依頼人の元へ向かった。

「この辺りは有力者が住む区域ですね」

王城に近いこの北東の地域は、通ってきた場所と違い見るからに高級そうな建物が建ち並んでいた。

「……田園調布みたいなものかな」

「でんえんちようふですか？」

疑問符を頭に浮かべているリアに、「記憶のある世界の高級住宅が集中している地域のこと」と説明した。

「依頼者は、政治人 ではないな。商人といったところか」

「ボルゾ・デイリース。悪い意味で有名な商人ですね」

「というと？」

「表では、総合的に武器に関わる商売をしている方です。武器を買うといえはことと言われるくらい幅広く流通していて、支店が他国にまであったりします。」

「それは随分と稼いでそうだな。 で裏というのは？」

リアは声量を落とし、

「禁忌に携わり、禁忌の技術を開発していると噂があります。」

禁忌という言葉に、ウィナは目を細める。

「それなら女王陛下が黙っていないと思うが？」

「 確証がないのかもしれませんが。元々その噂は彼の店が大きくなっていた頃から言われていることです。だから彼をねたんでということも考えられます。」

実際、何度か調査検分という形で家捜しは行われているらしい。

「で、結果はシロなら信じるしかない。」

「それでも毎年必ず要調査対象とされているみたいですけど」

真相はわかりませんと、リアは言った。

「俺達の仕事は、これを見る限り単なる護衛 ということではないんだらうな」

「そうですね。特に追加事項が記載されているわけではないようなのでそうだと思います」

やれやれと肩をすくめるウイナ。

そうしていると目的の家が見えてきた。

「……やっぱり大きいな」

「ですね」

リアもまた物珍しいのか、屋敷や庭を凝視する。

「門番もいると」

「商人は真つ先に狙われますから、仕方ないと思います」

門の近くに立っている男がこちらに気づき、警戒を強める。

ウイナは特に緊張することもなく、彼へと近寄り自身の身分証である指輪と騎士の証明書、依頼の任務を受けた旨を記した書類を見せる。

「失礼しました」

と男は礼儀正しく敬礼し、中へと進むことを許可した。

前庭を通り過ぎ、重厚そうな扉の前に、

「呼び鈴みたいなのは」

と探す間もなく、扉の方から開かれる。

「ようこそ、当屋敷へ」

扉の向こうから現れたメイド服をまとった女性が深々と一礼した。

第11話 依頼とメイドとご主人様と

「私は、この当屋敷にてメイド長をさせていただいております。テリア・ローゼルと申します。以後宜しくお願い致します。」
きつちりと一礼。

背筋がピンとした女性が、礼をする姿は目を見張るほど綺麗であった。

「丁寧な挨拶、感謝する。俺　私は、騎士ウイナ・ルーシュ。こっちが従者のグローリア・ハウンティーズ」

自己紹介にテリア嬢の眉がピンと跳ね上がる。

「何か？」

「いえ、近頃噂になられている方のお名前と同じ名前でしたので、少し驚きました」

「……なるほど」

あえて自分がそうでは言わず、ウイナはあいまいにうなずくことで明言させた。

「話の方は？」

「すでに騎士庁の方からうかがっております。主人は応接間にてお待ちしておりますので、どうぞこちらへ」

と促されたので、彼女の後へついていく。

屋敷の中は広い。

調度品もさりげなく質の高いものを使っているし、全体的には華美にならず質素なイメージの色合いやら照明やらで統一している。

かといって貧乏くさいということもない。

全体的に品があるので、おそらく主人がこの屋敷の装飾に手をかけているのなら、そちらの方に才能があるのだろうとウイナは推測した。

「こちらです」

応接間に到着したのだろう、テリア嬢によってドアは開けられ中に

座していた男は腰を上げ来訪を謝辞を述べた。

「ようこそ、我が屋敷へ。私が当屋敷の主人のボルゾ・デイリースと申します」

「私は騎士ウイナ・ルーシユ。こっちは」

「従者のグローリア・ハウンティーゼです」

互いに礼をし、早速腰を下ろして依頼の話に移る。

「要請書の方はすでにお目を通していらっしやると思いますが」

「護衛の任については確認しています」

慣れない敬語を口にしつつ、大筋は理解している旨を示す。

「そうですね」

最近、どうも狙われているようでして

「それは御当主の貴方がですか？」

「ええ、私も ですね」

「私も？つまり、他にも狙われている方がいらっしやるかと？」

「私には妻と一人娘のローザがいるのですが、どうやら標的になっているようなのです」

「そう判断できる物証もしくは何か証明できるものはありますか？直感も直感で大切なのだが、狙われているという具体的な証拠が欲しい。」

それがあればそこから犯人へと迫ることも可能だ。

こういう事態の場合　つまりは、攻める方と守る方だと攻める方が圧倒的に有利なのだ。

彼もまたそのことを理解しているのだろう、すぐさま柏手でメイドを呼び物を持ってこさせた。

「これらがそうです」

「……手紙に、矢ですか」

テーブルの上に置かれたのは数枚の手紙に、数本の矢。

ウイナはグローリアに手袋の有無を聞き、持っているようなので借りて、

「手紙をまず拝見しても？」

「ええ」

了承後、早速中身を見る。

「……『貴様の所行は全てお見通しだ。天に代わって貴様を裁く』、私達にしたことを決して忘れない。おまえの全てを奪う』、『鬼畜に死の鉄槌を』……ですか」

随分と恨まれているような手紙である。

しかも文を書き綴ったペンもまた血を連想させる赤色で書いているのだから、相当だろう。

「これらは屋敷のポストに？」

「ええ、投函されていました」

「ふむ」

指の腹を下唇にあてて頭を働かせる。

次に矢の方を手取る。

「これは？」

「私が庭先で花の手入れをしていた時に、私の足元に刺さった物です。他も私が外にいるときに同様な手口で」

「……なるほど」

威嚇 と見るべきか。それとも。

「今のところこれ以外に何かされているということはありませんか？」

「今のところは問題ありません。」

断言する彼に、

「御当主の方はそれでいいでしょう。奥方様や娘さんの方は？」

「問題があるとは聞いていませんが……」

少し困った表情で言う当主に、ウイナはふむとうなずき、

「物証は確認できましたので、これから護衛させていただきます。護衛するのは当主ですか？それとも奥方様や娘さんになられますか？」

「私としましては、私よりも妻や娘の方を優先してもらいたいのですが……」

「なるほど。では奥方様、娘さんに会わせていただいても？」

「それはもちろんです。」

再び柏手でメイドを呼び出し、妻や娘との謁見準備を始める彼を横目にウイナは物品をじいつと凝視し続けていた。

ボルゾ・デイリースの奥方と娘さんと顔を合わせ、護衛をするにあたって簡単な説明などをし、準備をするために宿舎の方へ戻る旨を伝えた。

当主の方はあまりいい顔をしなかったが、長期戦になる恐れがあると説明し、一時間後には戻ると納得させた。

そして、現在ウイナとグローリアはウイナの部屋にて対面していた。「ウイナさん、何かあったのですか？」

護衛任務について簡単な説明は、ウイナにはしている。

それゆえに護衛から離れる意味がグローリアにはわからなかった。

ウイナは無言で、一枚のカードを取り出し目で意図を伝える。

グローリアはその意図を見抜き、思わず目を丸くした。

【^{シンパニー}思念伝達】発動。

ウイナの示した意図は、ひそひそ話をするから例の霊輝術を発動させて欲しいとのことだった。

「ウイナさん、どういうことなんですか？」

「……確証は正直まだない。だが、今回の依頼は下手をすると、いや最悪俺達は死ぬ可能性がある」

「任務で死ぬ可能性があるのは仕方のないことです。でもそれは今更ではないんですか？」

この世界、ヨーツテルン大陸は人種族にとって決して楽園ではない。外を歩けば、魔物に当たるし、人買いや山賊、盗賊。そういう輩もいたりするのだ。

騎士ともなればそれらと相対することもある。

それゆえにグローリアはウイナが怖じ氣ついたのではと憂慮したの

だが

『それならまだいい。俺が言っているのはもしかすると実験に使われる可能性があるかもしれないってことだ』

『実験……？』

『人体実験というやつだな。まあ、それはあくまで最終的な話にはなるんだが』

『っ、人体実験っ！？』

唐突に出てきた物騒なキーワードにグローリアは大声を上げた。

『ど、どういうことですか？』

身を乗り出す彼女に、ウイナはなんとやってよいやらと頭をひねり、

『おかしいと思ったのは物証だった』

『え？』

『手紙の内容、見たらろう？』

ウイナに問われ、グローリアも手紙の内容を思い浮かべる。

そして、眉をひそめた。

『はい。内容はすさまじいものでしたけど』

『相当恨まれているってことだ。そして矢。これが単に狙って外れた などということであれば問題ない。気になったのは数と場所だ』

『数と場所 ですか？』

『狙撃された場所は、決まって外。』

『でも狙うなら狙いやすい場所を選びませんか？別に外で問題があるとは思えませんが……』

『そうだな。相手が本気で狙撃をしたいなら外でいいかもしれない。だが、相手のもつうらみなどを考えるとそんなことで納得できるのか？ たった一矢で相手を仕留めることで手紙に書かれた怨嗟を解消できるか？』

『それは……』

『そうになると、当然意図がある。わざわざ外で、かつ相手の足元に必ず突き刺す。』

偶然ならまだしも何度も同じ事をするのには相当な技量がいる。そこまでする意図』

『っ！屋敷の中にいるようにさせたい？』

『そうだ。相手を殺すだけなら、外の方がはつきりいつてやりやすい。普通の家じゃない。相手は護衛を雇うだけの財力があるんだ。屋敷にこもられる方がやりづらいはずなのに』

それにも関わらず屋敷の中にもらせる理由。

それはすなわち屋敷の中の方が好都合だということである。

『屋敷の中にいる方が好都合。屋敷自体に霊輝術の攻撃で殲滅ということも考えられなくはないが』

『それは無理だと思います。ある一定以上の霊輝術は、無効化させる結界がピテイウムに張られていますから』

『なら、答えは簡単だ。屋敷の中にいる方がやりやすい。つまり、

犯人は』

『屋敷の中の人……ですか？』

『だろうな』

ウイナはめんどくさげに肩をすくめた。

『それはわかりました。でもなんでそれが人体実験へとつながるんですか？』

『そっちは論拠はない。ただの直感だ』

『直感……』

それは　とどう返事をしたらいいのか、グローリアは悩む。

『あの当主、全然怖がっていなかった。』

『えっ？』

『普通、いくら狙われることが慣れていようと、あういう形で物理的にやられるとそれなりにこたえるはずなのに全く動揺がない。いや、言葉では身内の心配などもしていたがそれもポーズだけなような気がしてな』

『なるほど……』

『第一、はつきりと狙われているのが自分にもかかわらず妻や娘の命を優先するか？俺達は2人しかいない。明らかに当主へのフォロ―は手遅れになる可能性が高い。にも関わらず増援する素振りもない。向こうにはこちらの人数は把握しているのに』
自分の命よりも他人の命を。

言葉的には美しいし、その行いは聖人や善人、そう言われる類の行動だろう。

だが生きるものとしては悪といえる。
なにしろ自分の命をないがしろにしているのだから。

『まあ、これが自己犠牲の精神だけならこの話は終わり。だが、これが別の意味をもってくるならさっきの展開になってもおかしくない』

『それが人体実験？飛躍しすぎな気がしますけど……』

『リア。もしも自己犠牲ということ無くして、当主が護衛をいらないと考える理由はなんだと思う？』

ウイナの問いに、グローリアは腕を組み思考にふける。

『……考えられるのは、当主の周囲には腕利きの護衛がすでにいる場合』

『1人、怪しい人物はいたからそれも考えられなくもないな』

ウイナはそう言い、脳裏に最初に会ったメイドの彼女を思い出す。

『もしかして、メイド長……ですか？』

『歩き方と、仕草がどうにも気になった』

『……確かに洗練された歩きと仕草をしていた気がしますけど』

『彼女については置いておこう。それ以外なら？』

『それ以外……ですか』

頭を傾け、むむっと唸り。

『！』

顔を上げる。

グローリアの瞳には驚愕の色があった。

『もしくは、自分でどうにかするだけの力がある』

『そう一般人にもかわらず、な』

今回の護衛自体も本当は必要もないのに要請した。

当主は影でいろいろ噂されている禁忌を行っている人物。

うらみのこもった手紙内容。

不自然な人員配置。

謎のメイドさん。

明らかに自然としている当主本人。

『総合的に考えると、騎士の経験の浅い1人や2人くらいどうにか
できる権力をもっていることも加味すれば、俺達は』

『別の意図で収集された……？』

『ということになりそうだな』

第12話 幕間 家族計画

主人のための部屋である執務室にて、ボルゾ・デイリースは窓から外を眺めていた。

部屋には彼以外にもメイド長と、妻、娘がいた。

「今回は思ったよりも手こずるかもしれないな」

ぼつりと男は言う。

その眼光は先ほどウイナやグローリアと話をしていた印象はなく、まるで獲物を狙う鷹のようだった。

「でもあなた、それは仕方ないわ。あの娘。例の子よ？」

黄金色の艶のある髪が美しい、まさに大貴族と呼ぶに相応しい彼女

妻がそう夫を諭す。

「わかつているさ、レイニー。私も名前を聞いてまさかと思ったが、本人を見て確信したね。ああ、間違い無いと」

そこで男は振り返り、

「君も思うだろう？テリア」

「はい。あの存在感は間違いようがありません」

はつきりと答えるメイド長。

「カリスマもあるな。私も相対していて女王陛下がそこにいる感覚に襲われた。正直、正面きつての闘いは勘弁して欲しいところだ」

「なら絡み手かしら？」

ほっそりした指先で、己の髪を遊びながらレイニーは言う。

「それが賢明だろう。こちらの被害は最低に、相手の被害は最大にがモットーだ、我がデイリース家は」

にやりと嗤うボルゾ。

「女王陛下がご執心な娘を奪い、その娘を贄にして作るアレは果たしてどんな色を見せてくれるのか、今から楽しみだよ」

くっくっくと嗤う。

「でも、余裕を見せて後ろからざくり　なんてことのないようにしないと意味がないわ、あなた」

「一つのこと集中すると周囲の注意力が散漫になる夫をやんわりと指摘する。」

「わかつているさ、レイニー。まさかの場合は奥の手も使うさ。そのための”娘”だ」

ちらっとソファに腰をかけている少女を見るボロゾ。

そこにいるのは自身の娘であるロリータ・エイデン・リリス。

白い肌に、アメジストの双眸、美を司る神の手によって創られたかのような美貌。

ドレスから露出している肌には傷一つ無く、表情がないその顔や人から外れた美しさを持つ少女は、存在しているのにもかかわらず幻影のようであった。

「同性ながら嫉妬するわ。その美しさ」

瞳を鋭くして娘を見るレイニー。

「そういうふうにしたんだ。そうになっていないと困る」

ぼんと娘の頭をなでる。

それでもロリータは表情を変えることなく、ぼおーと虚空を見つめていた。

第三者から見れば、奇妙さや不気味さを感じる少女に彼らは特に感じることはないようだった。

「それにこの娘のおかげで君の美貌にもプラスになっただろう？」

「　そうね。そう言われると弱いわ」

人差し指で、つんつんとぷっくりとした少女の頬をつつく。

やはり少女は無表情のままだった。

「……やれやれ、こういうふうに情が湧くのはよくない傾向だが」

「いいじゃない。わたし達は人よ。矛盾をしているのが人なんだから」

「だから、一方では人を無情にモノとして扱い、一方ではヒトとして扱うのが正常というのか？」

まるで自問自答しているかのようなボルゾの言葉に、妻レイニーはそれでもと。

「正常とか異常とか、わたしには関係のない話よ。わたしにとって大事なのはあなたがいるかいがないか。そしてこの娘がいるかいがないかだけ。他はどうなっても構わないわ」

レイニーにとって世界とはボルゾとロリータがいれば、それだけで世界なのだ。

それ以外はまさしく蚊帳の外のこと。

例え狭い世界であろうと、楽しく生きているのなら何が問題あるのだろうか。

それが例え、蚊帳の外にいるものに害を為したとしても。

妻の言葉に彼はそれもそうだなと、納得し嗤った。

いつか自分達を罰しようとする存在が現れるかもしれない。

だがそれでも自分達は間違っているとは思わない。

自分達は幸福であった。

それが全てなのだから。

「テリア。お茶を用意してくれ。そして、始めよう 私達の家族

計画を」

第13話 護衛の始まり。思惑の始まり。

ウイナとグローリアが屋敷に再度顔を出した後、護衛任務の始まりとなった。

当主の提案により妻レイニーと娘ロリータ2人を重点的に警護し、当主は余裕があればフォローするという形になった。

当主の方はメイドのテリア・ローゼルがおこなうので問題が無いと後から言われ、ますますウイナは茶番劇の様相が見えてきたと肩をすくめた。

唯一幸いなことに娘の方がまだ年齢が幼いということもあり母親のレイニー

ーと共にしていることが多いのは助かった。

グローリアと共に護衛にあたることができるからだ。といっても。

（こちらの身柄を抑えたいのなら、分断を狙うだろう……な）
今回の黒幕が、ボルゾ・デイリースであるならば、そういう狙いになる。

しかし、まだ状況証拠だけの状態だ。

本当に狙われているならまた話は変わる。

（……手がかりは、手紙 か。あれは本物だった）
状況証拠だけで考えれば、この護衛任務は完全に罠。

ボルゾ・デイリースの狂言の可能性が最も高く、彼が騎士を使って何かをしようと考えているのが明白だ。

しかし、手紙がその考えに波紋を投げかける。

（単純に狙われていることを示すためにできた手紙にしては、どうにも本物すぎる。となると本当に誰かにうらまれていると考えるのが普通だ。）

商人という職業柄、人にうらまれることは多々ある。

だが、手紙の内容を見ると商人としてうらまれているわけではなく、

彼が噂で携わっている禁忌に関して言及している。

単なる妄言、噂を信じて吐いている言葉であれば問題はないのだが、どうも文面や書き方を見ると断定ができない。

彼の禁忌の被害にあったものが書いた　そう考えた方が手紙の存在が確立するのだ。

「……ややこしいな」

後ろ手で頭を掻きながら、ウイナはため息をつく。

「あら、何かうまくいかないことでもあったの？」

人の良さそうな笑顔で話しかけてくる奥方レイニー。

「生きているといろいろ悩みが出てきますから」

敬語で返すウイナ。

一応これでも騎士なので、ちゃんとするようにには努力している。

「それもそうね」

庭園を歩きながら、2人は言葉を交わす。

庭園はもちろん屋敷の外なので、本来であればいるのは好ましくはない。

しかし、主人であるボルゾ・デイリースの狙われるなら自分が最初だろうという言葉と、レイニー夫人の貴女がちゃんと守ってくれるのでしょ？と朗らかに言われ、押し切られてしまった経緯があった。

（……ままならないな）

と状況に対し釈然としない気持ちもあるが、それ以上に彼女の言動に違和感を覚える。

夫が狙われているにもかかわらず、彼女もまた普通であった。

動揺など表に出すこともなく、淑女として品のある所作に淀みなどない。

あまりに自然すぎて、警戒すら湧かぬ彼女の行動に、ウイナは一つの疑問を持った。

（……もしかすると彼女も共犯　か？）

別にそれはおかしい話ではない。

夫がいくらうまく禁忌に関して隠蔽したとしても、常に一緒にいる

妻がその異常に気付かない道理はない。

男が思っているよりも、女のセンサーは高性能。

完全な隠蔽など土台無理な話だ。

だとすると、彼女は傀儡なのか、それともただの共犯者なのかということだが。

ウイナは、レイニー夫人の行動などを思い返して前者　傀儡という線を消した。

彼女レイニー夫人は、良くも悪くも我が強い。己をしっかりと持っているというべきか。

自分の立ち位置をしっかりと理解していて、そしてその場所に居続けるためにはどうするべきか、その方法論をしっかりと確立しているように思われた。

そういう人間は怖い。

なぜなら、目的のために笑いながら相手を殺す　といったこともできてしまうからだ。

ウイナは、異常を読み取ることに長けてはいるが、相手がそれを正常と見ている場合、異常の発見はしづらくなる。

ウイナにとって天敵であるのは、ボルゾ・デイリースではなく、夫人レイニーであった。

ウイナの目の前をデイリース夫妻の娘ロリータと歩いているのはグロリーア。

無口でどこを見ているのかわからない表情の少女は、さつきからじいっと花を凝視していた。

銀系のような白銀の髪は、太陽に反射しまるで天上の女神のような煌めきを生み、しっかりと開いているアメジストの双眸は人の深奥まで覗きこめるような神秘がそこにある。

表情がまるでない少女は、人形のような作り物めいた美しさがあった。

護衛対象があまり動かないことは、護衛するものからしてみると護

衛はしやすい。

周囲に目を配りながら、遠距離からの狙撃を警戒し霊輝術を行使していた。

ルフト・ツィンケル
【風勢図陣】。

半径100メートルから200メートル程度の半球状の探知結界陣の霊輝術で、範囲内に入った異物を探知できるものである。

使用時の霊素量しだいで範囲を拡大できるが、爆発的に霊素量が増加することと、霊輝術の行使中は常に意識を集中させていないといけないため、範囲は数百メートル級がせいぜい。

それでも死角をなくすことができるこの霊輝術は重宝されている。現在、範囲内に入っているのはグローリアとロリータ、そして後ろにいるウイナとレイニーの4人。

これ以外の異物が入ればすぐさま陣は反応し。

「っ！ウイナさんっ、6時の方向！」

探知結界が作動。

すさまじい速度をもった物体が屋敷の方から放たれ、レイニー夫人の背中を標的にする！

「はあっ！！！」

しかし、どこから来ているのかがわかって以上、ウイナが迎撃に失敗するということはない。

赤錆の魔刀を顕在化させ、そのままその物体を切り壊す。

数秒にもみため時間だった。

「……黒衣か」

ウイナは、放たれた場所を見る。

屋敷の屋上、そこに太陽を背にした黒衣の人間が、弓矢を持ち残心をしていた。

所行は暗殺だが、堂の入った弓術にウイナは感心する。

相手もこちらが注視しているのを理解しているはずだ。

しかし、相手はまるで動こうとはせず、こちらをじっと見ているのみ。

「ウイナさん」

グローリアも娘のロリータとともに彼女の側に立つ。

探知結界はなおも起動中。

わざわざ姿を見せている暗殺者が、陽動だとしたら背面が死角となりそちらからの攻撃も考えられる。

対面して数刻。

何事もなかったかのように黒衣は身を翻し、屋敷の裏手へと飛び消えた。

「……追いますか」

「いや、相手の目的が分断の可能性もある。むやみやたらに追うこともないだろう」

冷静すぎるその判断に、レイニー夫人は彼女達に見られぬ角度で爪をかんだ。

最初の襲撃から一週間が経った。

あのも何度か襲撃はあり、時には主人であるボルゾ・デイリースへと向けられることもあったが、その都度ウイナ達は撃退していた。

新人騎士ともなれば、慣れない初任務に常に警戒が必要な護衛任務は精神をすり減らし、ミスを連発してもおかしくはない。

しかし、彼女達は歴戦の騎士であるかのように常に冷静で合理的で効率的に任務をこなしていた。

そのことが彼らを焦らせた。

屋敷の一室にボルゾ・デイリース、レイニー、ロリータ、テリアの4人が集まっていた。

護衛の2人には何かあればすぐ駆け出せる位置にいてもらってはい

る。
「……想像以上に優秀だな」

呆れるようにボルゾは言った。

「今まであれば、もうとつくに終わっているのにね」

少しばかり苛立っているのだろう、爪をかむレイニー夫人。

「ただの新米騎士ではないというのは、前情報からわかっていたがやれやれどうして」

いくら性能が良かろうとも、経験がそれについてこなければ簡単に拿捕できるのだが、その隙を見つけることが彼らにはできなかった。「少し、欲を出しすぎたか」

メイドのテリアにワインをついでもらい、ボルゾはそれを口にする。「あなた、これからどうするの？」

「二つほど私達が取るべき道がある」

と、ボルゾはそう語る。

「一つは、あと一日かそこらで護衛の任務を打ち切る。そして、新たな新米騎士をよこしてもらおう。」

「でもそれだと怪しまれる恐れがあるわ」

「わかっているさ。その辺りはなんとかうまくやるしかないな。だが一番安全だろう。下手をうったとしてもしばらくブラックリストに載るだけ。その期間さえ我慢すればまた依頼を受け付けてもらえる」

怪しまれている内はいい。それだけでは捕まるまではいかないから。問題なのは確実に物証を取られることの方がマズい。

安全策としては現段階、最良の一手だろう。

「……もう一つは？」

「このままあの2人を護衛として雇い、今まで以上の強硬手段をとる」

「力押し……ね」

「切り札を出し惜しみせず、最初に開く。少なくともわずかな隙は見いだせるはずだ。」

「その一瞬を狙って、強制的に霊輝陣にかける……。悪くはないわでも」

眉を眉間に寄せ、レイニーは懸念事項を伝える。

「うまくいくかしら？」

彼らもただ単調にウイナとグローリアを狙ったわけではない。様々な手段をもって狙っていたのだが、その全てがことごとく打ち破れたのだ。

これで今回の手段が成功すると自信をもって言うことはできなかった。

妻の懸念は、ボルゾも同意するところであった。

「わかっている。おそらく成功確率は五分。しかもここでの失敗は即、私達の死へとつながる」

逃げ道などない。

一度踏み込んでしまえば、戻っては来られぬ片道切符。

ゆえに彼らは悩み、そして。

第14話 分断

「一週間か」
ぼつりとウイナがつぶやく。

ソファに腰を下ろし、未だ話し合いが続けられているだろう部屋のドアを見る。

「そうですね」

目でどうします？と問いてくるグローリアに、ウイナもまたそろそろしびれをきらす頃だろうと答える。

黒幕が彼らならば。

そして

「！」

爆発音が彼らがいる部屋で起こった。

ウイナは瞬時にかけ、ドアを蹴り倒す。

グローリアは後ろからの強襲を警戒し、ウイナとは背中合わせで周囲の状況を探る。

今の音に反応して、屋敷の人間が騒ぎ始める。

一方、部屋の中は煙が充満し、視界が利かない。

「リア」

「はい。風よ流れて【翠の風】」
グリユーレ・ヴェーエン

リアの霊輝術の発動とともに、空気の流れが変わりウイナ達が入ってきたドアの方へ、煙が勢いよく流れていく。

視界を遮るものがなくなるにつれて、部屋の状況が見えてくる。
立派な内装はあちこちはがれ、焼失。

中にいる人間もあちこち火傷を負い、満身創痍。

「っ！2人足りない」

中にいるのは4人。

メイドのテリア、主人であるボルゾ・デイリース、レイニー夫人、

娘のロリータ。

しかしいるのは主人であるボルゾ・デイリースとレイニー夫人のみ。
「ウイナさんっ!!」

叱責するようなグローリアの声と共に、横へ飛ぶ。

そこに風切り音とともに過ぎ去るナニカ。

飛来元は、この部屋にて唯一窓がある場所からだった。

赤錆の魔刀を顕在化させ、窓の前に立っている人物と対面する。

「何故と聞くのは今更　か？」

「ええ、その通りですね」

にこりともせず答えたのは、屋敷のメイド服をまとった女性
テリア・ローゼルだった。

その脇にはロリータ嬢が抱きかかえられている。

「わたしの仕事は彼女を主の元へ連れて行くことです」

「そう簡単に依頼内容を話すのは守秘義務が守られていないんじゃないのか？」

にやりと笑うウイナに、彼女は問題ありませんと答え、

「ここで貴女方も始末すればいいだけですから」

言葉を合図に、空いている手をこちらに向けて振るう。

ただそれだけの動作で、殺意あるナニカがこちらに放たれる！

「っ」

身体を捻り直感でよけ、その姿勢のまま赤錆の魔刀をテリアの心臓
めがけて投げつける。

「！」

が、テリアはあっさり回避しそのまま窓を突き破り身体を宙へと踊
らせた。

ここは2階だが、無事着地できると踏んでの行動だろう。

「判断が早いな……。リア、そっちは？」

窓の近くには寄らず、治癒の霊輝術を行使しているグローリアに声
をかける。

「時間はかかりますけどどうにかかなりそうです」

「そうか。ならそつちは頼む。俺はあいつを追う」

「わかりました。こちらはまかせてください」

グローリアを部屋に残し、ウイナは正面入り口へ向かった。案の定、すぐさま幾つもの矢が窓辺に突き刺さった。

顔をだした瞬間、こちらに傷を負わせるつもりだったのだろう。油断がならない相手のようだ。

正面入り口を抜けると、遠くに背を向けて走るメイドの姿が見えた。ちらりとこちらを見る仕草はどうやら誘っているようである。

「やれやれ」

ウイナは嘆息し、追跡するために駆けだした。

一方その頃、屋敷の中は大騒ぎだった。

テリア嬢だけが使用人ではない、執事やメイド、その他にも働いている人間は数多くいる。

大規模な主人襲撃の報は屋敷の住人を狼狽させた。

使用人達の中には、使用人のトップにいるテリア・ローゼルの不在に嘆きつつ、ナンバー2に意見をもとめているが。

「……ふう。これでなんとかなったかな」

グローリアは、額の汗をぬぐい人心地つく。

主人であるボルゾにしても、レイニー夫人にしても致命的な傷や火傷は完全に治した。

特に女性であるレイニー夫人には、ほんの少しの傷も残さないように念入りに靈輝術をかけた。

肌を見せても問題はないレベルだ。

二人は今も眠っている。

傷は治したが、体力が戻ることはないので、睡眠してもらった方が治りやすい。

後はこの混乱を収めて、余裕があればウイナの元に行きたいところではあるが。

それが叶うことはなかった。

何か甘い二オイがしたと思うと、グローリアの意識はとだえる。彼女が最後に聞いたのはごめんなさいね。という女性の声だった。

「もう逃げないのか？」

ウイナとテリアの逃避行は、郊外の広い敷地で終わりを告げた。

2人の距離はおおよそ100メートル。

テリアは、脇に抱えていたロリータ嬢を放し、手に持つロープであつさりとその動きを封じる。

少女は何も言わず、やはり無表情でどこか遠くを見つめているようだった。

「ええ、わたしの役目は貴女を引きつけることです」

あつさりとテリア嬢は自らの役割を告げた。

そのことにウイナは少しばかり眉を跳ね上げ驚きを表す。

「……随分とあつさりと言ったな」

「信じませんか？わたしとしては貴女が信じようが信じまいが関係ありませんから、どちらでも構いません。ただ、確実に犠牲になるのはあのエルフの少女でしょうが」

飄々とした態度。

しかし、ウイナは全く動揺は表さず、ただ一つ気になることを聞いた。

「何故、グローリアがエルフだとわかった？耳を隠していたが」

「ご冗談を。あの程度で隠すと言われるとこちらとしては鼻で笑うレベルの話です」

とこちらを嘲笑しているようだがテリア嬢の表情はあまり変わっていない。

無表情とは言わないが、あまり感情を出すことになれていないのか、それともそういう事情があるのか。

「そうか。それでおたくの役割はこうして成ったようだが、これから先はどうするつもりだ？」

「わたしの役割は貴女をできるだけ引きつけること。そして」

大気中の霊素が、彼女へと集約する。

「貴女をここで半殺しにすることです」

空気を切り裂くように振り切った彼女の仕草が合図。
数百の霊素の矢がウイナへと降り注いだ。

「っちつ！」

舌打ち鳴らし、ウイナは駆けだした。

もちろんテリア嬢の元へ。

足を止めれば、いくら赤錆の魔刀で防御していても幾つかは通ってしまふ。

大したダメージにはならないだろうが、その足止めで動きが止まったあとに大技がきたらそれこそ避けられない、そう判断した。

「なるほど、それはいい手です」

ウイナの先見にテリアは素直に感心する。

「しかし、わたしが相手でなければの話ですが」

左手を上には振るう。

同時に霊素が収束し、矢となりて正面からくるウイナへと放たれた。
だが終わらない。

彼女は何度も両手を様々な角度で振ることで、その軌道上に矢を生み、それを放った。

その数はすでに数千。

一対一の闘いではなく、一対千となるその闘い。

弾幕ともいえるその数量に、ウイナは足を止め、全力で防御に集中するしかできなかった。

そして足が止まったウイナの隙を彼女は見逃さない。

「来たれ」

彼女の呼びかけに応じ、虚空から生まれる弓を右手で掴む。

そこに矢はない。

だがそれでいい。

テリアは霊素を収束させ、矢を創り出す。

先ほどの矢と違い、ただ1本の矢。

それを弦にかけ、胸を張り目標を見据える。

その姿はあまりにも綺麗すぎて、儀式を執り行う祭司のようでもあった。

「行け」

ただ一言。

それを合図に彼女は弦を放つ。

ひゅつと風を切る音と共に放たれた矢は、一直線にウイナはと向かう。

「！」

自分を狙う一撃に気づき、回避行動に移るために状況を考察するウイナ。

しかし、矢はその形状を大きく変え彼女へと迫る。

その姿はまさしく巨大光線。

直径20メートルほどの光がウイナの視界を埋め尽くす。

「っ！」

だが、ウイナは回避した。

何も考えずに全力で真横へと飛んだ。

これがもし加護がないただの人間であれば、避けることはできなかつただろう。

着地を考えずに飛んだため、そのまま大地に転がるウイナ。

真横を通り過ぎる巨大霊素砲。

まさに間一髪。

安堵の息をこぼそうとするウイナに、悪魔は微笑む。

「いい判断です。ただわたしでなければの話ですが」

「なっ!？」

ウイナの真横を通り過ぎた霊素砲は方向を切り替える。

何か反射したかのように折れ曲がり、ウイナの側面を完全に捉えた。

今度こそ避けきれぬ巨大霊素砲を前に、ウイナは悟る。

何故、暗殺者まがいのことをしていた彼女がこんな広い場所を闘う場としたのか。

そして自分が彼女を暗殺者として見ていた時点で、すでに詰んでいたということに。
ウィナの意識はそこで途絶えた。

第15話 尋問と悪夢と

「う、うう……」「う、うう……」
ひんやりとした感覚に起こされ、グローリアはゆっくりとまぶたを上げる。

視界には、薄暗い地下室を思わせる陰な空気のおいを感じ、思わず眉をひそめる。

「っ」

後ろにいつている手を前に出そうと力を入れるが、何かによって束縛されているのだからか全く動かせない。

頭は動かせるようなので、自分の様子や周囲の様子を探る。

自分の方はどうやら武器など全て没収されたようだ。

服装も儀式にまとうような襦袢のみとなっていて、直接外気が肌に触れ少し肌寒い。

さいわい下着までは取られることはなかったものの、異性に見せられるような状況ではなかった。

周囲の様子も暗闇に目が慣れて、詳細が視えてくる。

やはり地下室に近い場所で、石で作られた床や、壁。目の前にある螺旋階段。

ところどころに燭台はあるものの今は灯されておらず真っ暗闇。

さらに状況を探るには身体を動かさないといけないのだが、手首と足首に拘束帯が取り付けられているようではなかなか動きがとれない。そうなる[あとは](#)霊輝術リヒトアークのなるのだが。

「光よ、照らして【照明】」

照明の霊輝術を使う が、案の定。周囲の霊素は消費したものの術として発動はしなかった。

やはりというべきか、おそらく封呪系の霊輝陣など張られているだろう。

「……やっぱり」

足下を見ると薄暗いが、淡く光る蒼い光。

蒼光は、石の床に幾重にも重なり合う線から発せられるもの。線が描くのは多種多様な図形やら文字。

それらは世界に働きかけ一定の効果を顕す。

普通の霊輝術と違い、永続性が高い性質を持つ霊輝術の一形態、霊輝陣。

霊輝術を研究する彼女もまたその技術には精通していた。

「……吸収と、貯蓄。ということとは、何か儀式系の霊輝術でも使うつもり？」

霊輝術を使わなくても、体内にある霊素も徐々に減少している現状、何もせずにこのままいると体内霊素の減少により気絶そしてそのまま死亡というシナリオを描くことになる。

自分が生き残るには霊輝陣の解呪か、この場所から脱出の2つの手段しかない。

難易度が高いのは前者。

選択するなら後者であるのだが。

グローリアは嘆息する。

新しい空気が、この密室な地下室に入ってきたのを感じたのだ。

同時に生まれる人の気配。

かつかつかつと石の階段を降りてくる音。

言わずもがな、来訪者は自身をこの場所に封じたものに他ならない。

そして、来訪者とグローリアは対面を果たす。

「貴方方ですか……」

「やはり悟っていたかな、騎士の従者」

そう、彼女の前に立っていたのは傷一つないボルゾ・デイリースその人であった。

「安心するといい、服を脱がせたのは妻だ」

「……それはありがとうございます」

儼然とした面持ちで言うグローリア。

意識が無い時に裸を見られるのと、意識がある時に見られるの、どつちが恥ずかしいと言えば後者であるのは当然であろう。

そういう意味では、グローリアが顔を赤らめてもおかしくはない。しかし、このような事態を想定した訓練をやるのが準騎士学校である。

カリキュラムに全裸になって多くの異性から凝視されるという授業や、疑似尋問などがある。

当然グローリアも体験してきたことのため、異性に見られる程度であれば恥ずかしいという感情を切り離せる。

そんな彼女の様子にボルゾは、

「彼女が来ることを期待しているのか？ 残念ながらそれはないぞ。

テリアが始末した」

こつちの様子を安堵と見なしたのだろう、彼はそんなことを言い放つ。

グローリアは胸中でつぶやく。

（ボルゾ・デイリースはクロ。妻レイニーもおそらくクロ、そしてテリア・ローゼルもクロ……かな）

黒幕に関しては、想定内。

ウイナに関して、グローリアは心配などしていなかった。

全く動揺のないグローリアの姿にボルゾは少しいらだちを覚えた。

今まで新米騎士をこういう形で捕縛した場合、自身の状況に動揺し、様々な情報を口にしたたり、おびえたりした。

なのに彼女にはそんな素振りがまるで見えない。

それが、彼をいらだたせる。

まるで、自分の行動がすでに読まれているような不安に駆られた。

ボルゾが悟ることはないが、グローリアと今までの新米騎士との違いは、簡単だ。

グローリアは霊輝術の探求者。

力を得るためなら、それこそ肌を重ねることもいとわれない精神性を持っているからだ。

「わたしをどうするつもりですか？」

「君達には贅となってもらう。」

「……それでこの靈輝陣ですか。何か 儀式的な靈輝術でも行使するつもりですか？」

詰問に近い彼女の言葉。

彼はそれに答えず、彼女の胸をがしとわしづかみした。

「っ」

わずかに走る痛みにも顔を少しゆがませるグローリア。

「……安心した。人形と話しているような錯覚を覚えさせられる。君と話をしていると」

「……そうですか。それより後ろ見た方がいいと思いますよ？」

「何？」

ボルゾは何かを感じて、後ろを振り返るとそこに立っていたのは妻のレイニーだった。

「貴方、何をしているのかしら？」

半眼でレイニーは夫がグローリアの胸をつかんでいることに非難の声を上げる。

「……ただの尋問だ」

「……そう。後で話を聞かせてもらいますから」

ふんぷんと小腹をたてて、レイニーは今は納得した。

彼女は、まるでモノを見るかのようにグローリアを見て、

「さっさとやりましょう。時間もそれほどあるわけではないわ」

「……ああ。やるか」

ボルゾは右手の人差し指をこちらに見せつけるように出し、

「君にはたっぷりと悪夢を見てもらう。」

せいぜい悲鳴こゑをあげたまえ。それこそが価値につながる
人差し指にある指輪が煌めく。

「ああああああああああああああああっ！！」

次の瞬間、地下室にグローリアの嬌声が響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7894y/>

シルヴァニアによろこそっ！！（完全版）

2012年1月11日07時26分発行